壞されるのであるから、此れは尤もの事である。保守黨に反對の自由派は多額の稅を拂ひ、共鳴者の多きに拘はらず、國政運用に對する發言權がないから、此れまた不平である。時々ザベルン事件のやうなものが起り、兩者の軋轢を甚だしくするから兩者の間は石火相搏ち、まさに電光を發せんとするの程度にあつた。此れが大戰前の獨逸の政治狀態兼社會狀態であつた。

事情斯くの如くであるから、獨逸社會民主黨の目的は明らかである。彼れらは代議政體のために働らき、官僚の絕對權力を殺ぎ、個人に一層大なる自由を與へ、內政外交に於いて獨逸をして徐々と且つ自然的に發達せしめんとするのである。然るに保守黨は武力を以て政策とし、武力に依つて獨逸を普魯西化し武力に依つて獨逸の至上權を打ち立てゝ、以つて獨逸を歐洲の否世界の最大强國にしようとするにある。保守黨を代表する著逃家フリーマンは其の著『余にしてカイゼルならば』の中で斯ういふて居る。

『吾人は如何なる代價を拂つても、選擧法を改正せなければならぬ。政府と國民との戰爭てふ代價を拂ふても、此の改正を辭する事は出來ない。斯く云はゝ或は反對する者あらんも、生命を救はんとして、子供に大手術を施さんとする親の心中と同樣である。獨逸國を行政的に觀察すると今や死に瀕せる患者である。此れを救ふは只憲法の變更あるのみ。議會に反して此の憲法の變更を爲し能はずとせば、議會の意志を顧みずして變更すべきである。これ親が子供の意志に反して醫者に手術を命ずるが如きものである。

『此れと共に吾人はまた外國との戰爭の、免がれ難きを思はなければならぬ。獨逸の發展に對する英國の悔恨、佛國の復讐喝望は、茲に敵愾心を惹起せしむる。だから獨逸にして最大權力を握るに非ざれば、此れらの敵愾心を一掃することは不可能である。故に獨逸を愛し、冒險と企業の發展を希ふ者は、宜しく國家の全力を發揮すべき戰爭の破裂を待つべきである。

『戰爭に於いて獨逸が勝利を得んか、普佛戰爭の結果と等しき精神的大復活を來し、その復活はまた行政にも及ぶべし。唯戰爭は將來の事に屬し、對手の必要があるから、獨逸の注文通りには參らぬ。そこで先づ手近かの現在の選擧法を變更し、憲法にも大々的修正を加ふべきである』。

然らばフリーマンの選擧改正とは如何なるものなるかと云ふに、彼れは同書に

於いて『社會主義者をば悉く國外に追放すべく、總ての無政府主義者も同樣に取扱ふべし』と云へるを見れば、想半ばに過ぐるものあらん。

斯くの如くフリーマンは、武力に依つて獨逸に絕對官僚主義を建てようとしたが、ベルンハルヂー將軍は其の著書『我れらの將來』の中で更に一歩を進めて、武力を以つて獨逸を全歐洲、否全世界の覇王たらしむべきことを力說した。將軍は獨逸の發展が歐洲に於ける列國の均勢に依つて妨げられて居るから、先づ武力に依つて此の均勢を打破せなければならぬとの主張の下に、絕對主戰論を唱へた。將軍の豫想せる敵は無論英國であつた。將軍は又『武裝せる力は道德的にも、智的にも、又有形的にも、文明の至眞なる根底なり』と主張し、よし英獨同盟が成立するとするも、此れは獨逸が其の同盟の主人公で、英國は此れが副である。だから武裝の撤廢問題でも英國が先づ其の武裝を解き、其の海岸防備を廢しなければならぬと主張した。すなはち獨逸は英國を實際的屬國としなければ止まざるが、將軍の主張であつた。斯くの如く一方に頗る熱烈なる帝國主義、軍國主義があり、此れが反動として必然的に社會民主黨が地歩を占めて來たのである。

一たいに獨逸國民は能く訓練された國民である。彼れらは少數の官僚、軍隊、警

官に依つて堅く統御されて來た。官命に絕對的服從を表することは、殆んど彼れらの第二の天性となつた。訓練されたる國民は法律に生きる國民である。然かも其の法律は政府が人民の精神を打ち碎く爲めに造られた法律である。此れは一面に國家の力となるが、又一面に國家の弱點を形成する。此の弱點は社會主義者にまで感染して、開戰當時の社會黨は殆んど不可解なる行動に出でた。第二の天性が不知不識の間に發露せるものである。だから獨逸社會民主黨は佛國人、英人、米人、伊太利人、和蘭人、乃至瑞西人の如く抽象的なる主義の爲めに戰ふ事が出來なかつた。獨逸では政府が人民の意志を行ふのでは無くて、人民が政府の意を承けて活動するを原則とする。斯る組織の下に在りては、政府が能く〳〵國民の意志を忖度し、國民の意思と大差なきものを以つて政府の意志とせなければならぬ。然る時組織は不完全でも、結果は必らずしも不完全ではない。然るに獨逸の爲政府は自分に好都合なる意志を、國民の意志に反して、此れを國民に押し附けようと試みた。此の高壓手段もビスマークの如く成功を齎らす時は、國民は公然と反對を表することを爲さぬ。併しながらウイルヘルム二世の如く、內治外交共に失敗するに及んで、國民は起つて當局者に反對の態度を取る。すなはち茲に爆發の導

火線を發見したのである。軍閥主義武斷主義の國家は此れが弱點である。少數の政治であるから、やゝもすれば國民大多數の精神と背馳した方針を取る。少數が大多數を壓する時、極端にまで進めばすなはち革命が起る。

第二十三章　世界大戰の因果

事後に於てこそ兎角の豫言者も出でたれ。一九一四年の前半に於ては歐洲の平和が掻き亂され得べしとは認められて居なかつた。勿論當時既に愛蘭の紛擾はあつた。また何處の國だつて戰爭の廢止、軍備の縮少と云ふやうな問題が新聞にも雜誌にも論ぜられて居たのは事實である。併しながら所謂乾坤一擲と形容せられたる如く、其の關はるところの至要至大なるが爲めに、然かく輕々しく世界の平和が亂さるべしとは思はれなかつた。然るに事實は此れらの豫想を破り、俄然として人口總數四億を擁する歐洲六強國の五つが二千萬の軍人に對して動員令を發し、昨日まで平和を樂しんだ歐洲の天地は忽ち化して修羅の巷となり、終に全世界を戰塵に包んでこゝに未曾有の大戰が始まるに至つた。然かも八年計畫を以つて竣成さるゝ筈のキール運河が七年間に竣成され、時は一九一四年六月二十四日此れが竣成式を擧げ、世界戰亂の五分前とも云ふべき時に、そんな事とは知らず英國の艦隊も其の祝典に加つた。然るにそれから僅かに五週間を出でずして、茲に俄然として世界平和の保護者と一部から目されて居た獨逸皇帝が、全歐洲

を戰亂の渦中に投げ込んだことは、英國人にとつては實に青天の霹靂、寢耳に水の非常事件であつた。當時一般の英國人は獨逸皇帝は何故に戰爭を始めたか。戰爭の眞の目的は何か。戰爭の結果は何うかなどゝ、驚きの眼を睜つたが、此れは驚く方が寧ろ沒分曉の譯りを免れぬ。英國人は自國と比較して獨逸は遙かに內政が整つて居ると考へて居た。外交上にも三國同盟が新たに更締された後である。だから獨逸は一般に滿足を表して居るべきであるとは英國人の考へであつた。其の獨逸が墺匈國、土耳其などゝ結托して戰ひを佛、英、露、白耳義、塞維に挑み、此の挑戰は終に世界を戰雲に包んで、伊太利が獨逸の敵と早變りし、日本、米國なども獨逸の敵となつた。此れは確かに頭腦の鈍重な英國人に取つて驚ろくべき出來事であつたに相違ない。併しながら前にも述べたる如く、驚くのは驚ろく方が間違つて居る。獨逸の投げたる挑戰の手袋は尙早であつたかも知らぬが、形勢は早晩斯くなるべき理由が十二分にあつた。ウイルヘルム二世の時代に於いては免がれぬ事件であつたのである。

ウイルヘルム二世が獨逸聯邦の帝坐についた時、獨逸は歐洲各國の勢力の扇の要めのやうな位置に居り、獨逸の地位は强固不拔のものとなつて居た。三國同盟は確實に結ばれ、獨逸の外敵は遠くに退けられて居た。これは縷述せる如く主としてビスマークの手腕に依るもの。彼れは先づチユニスを佛國に與へて伊太利と佛蘭西との間に敵意を生せしめた。彼れは次ぎに佛國を使嗾して埃及に侵入せしめ、以つて英國の感情を害せしめ、更にまた露西亞をして亞細亞に於ける英吉利の勢力を遮らしめて、兩國間の敵情をそゝつた。茲に於いてか伊は佛を棄てゝ獨逸に趨り、露佛は共に英國と仲が惡くなつた。ビスマークは此の反感を利用して自らは英國と親しみ、一旦緩急あらば英國の援助を仰ぐか、少くとも英國を中立國たらしめん事を劃策した。此の邊のビスマークの巨腕は實に驚ろくべきものである。彼れの外交政策は着々として成功し、未だ一度も齟齬を來さず、前後三回の戰爭に打勝つて、終に獨逸を歐洲大陸に於ける最大强國たらしめた。彼れの對英外交は平和主義であり、然して此れが獨逸に最も利益なるを見て、依然として此の政策を持して渝るところがなつた。

然るに一八八八年ウイルヘルム二世が皇位に即いた。此れが獨逸の對英外交の一轉機、換言すれば今回大戰の因つて生れた遠因である。ウイルヘルム二世はフリードリッヒ大王の天才と萬能性の所有者なることを自信し、四周を取り圍む

ところの訶諛者の言に益々己惚れ心を起し、神から派遣せられたる特別な帝王であると云ふやうに考へた。己惚れは何人にありても危險なるが如く、帝王に於いて特に危險である。就中憲法が專制を認めて居る獨逸皇帝に於いて特に然りである。ウイルヘルム二世が『國家の主人は唯一人なり。そはすなはち朕なり。朕に叛く者は朕之を微塵に碎かんのみ』といひ、又『朕等ホーヘンツオルレルン家は神に依つてのみ王冠を授けられたるなり』といひ、頗る誇劇じみた大言壯語を事とし て、やゝもすれば自分に逆ふビスマークに免職の命令を下して終つた。ビスマークが居なくなつてからは媚たい小姑は居ないし、皇帝は大舞臺を一人で舞つて四角八面に切り廻して行つた。然かも膽力と云ふ德はウイルヘルム二世に缺けて居り、用意周到と云ふ熟語も皇帝とは全然他人で、然かも風の音にも耳を欹てるといふ敏感さで、衝動を以つて神慮と誤解し、水のまに〳〵莽草然たる政策を弄したるが爲め、折角ビスマークの築いた土臺は破壞され、英國とは仲が惡くなり、米國も猜忌心を以つて獨逸を眺めるやうになり、他の與國とも夫れ〳〵圓滿の關係を缺ぐに至つた。

官位を退いて、憂ひと悲しみを以つてウイルヘルム二世の行動を見て居たビスマークは、其の手記に斯う書いて居る。

『ウイルヘルム一世は全く此の種の虛榮を有し給はざりき。帝は天下公衆の政治批判を懼れ給ひき。帝の御前にて訶諛的言辭を弄せんとする者は無かりき。帝は皇帝の位置の壯嚴なるべきを感じ、朕の面前にて朕を賞する權ある者は、また朕の面前にて朕を恥かしむる權を有すとの聖慮を有し給ひき。余は恐る、獨逸にして現今の道を辿り行かば、其の未來は刹那的衝動の犧牲となるべきことを』。

併しながらウイルヘルム二世は斯んな事に耳を傾むけるべく、餘りに我が强かつた。自分の遣ることは何事も成功すべきものと確信して、自己の途を驀然と突進した。帝の外交政策で最も失敗の顯著なるは、前にも一寸述べた如く其の對英策であつた。一九一一年の夏再び摩洛哥事件が起り、佛國と獨逸とは將に戰端を開かんとした。此の時獨逸の對英策は獨逸に累ひし、英國は獨逸を助くべかりしを、反對に佛國に對して同情を持つやうな始末になつた。當時ロイド・ジョージ氏が『若し獨逸にして佛國を攻むるならば英國は無論佛國を助けなければならぬ』と明言したのは、如何に獨逸の對英策が謬まつて居たかを語るに十分なる材料である。

茲に再び繰り返して云ふが、ビスマークの在職當時及びウイルヘルム二世即位

の當座は、獨逸の地位は絶對的に安全なものであつた。獨逸は容易に敵を擊退し得るのみならず、三國同盟は事實に於いて四國同盟であり、伊太利の誠意は些の疑ひを容るゝ餘地が無く、必要に應じては土耳其も羅馬尼も獨逸の味方として參加せしむるを得ると云ふ、實に外交上四通八達の要路を占めて居た。土耳其と羅馬尼が獨逸が加擔すれば、獨逸が露國と戰爭ある場合に、三國同盟の多大な援けとなり得たのである。故に獨逸は土耳其を扶くべき必要があるに拘はらず、反つて土耳其を伊太利及び巴爾幹諸國の蠶食に任せて、此れを棄てゝ終つた。土耳古は如何に老大振はずと云ふも、尚ほ歐洲の均勢に必要なる役割りを持つて居た。其の土耳其を獨逸は棄てゝ終つたのである。其の後新たに出來た均勢が、獨逸に取つて不利なるものなりしは云ふ迄もないことである。そこで此の獨逸の弱點を看取した羅馬尼は忽ち獨逸を離れ、三百萬の自國民の住む塊匈領を侵さうとするに至つた。大戰中羅馬尼が協商國に加擔するや、世には此れを以て戰爭の終結近きにありと爲した。此れは輿論事實の裏書きを得るに至らなかつたが、併しながら羅馬尼が如何に機會を見るに敏なるかは、世既に定評がある。此の機敏な羅馬尼が獨逸を逃げたと云ふことは、一葉落ちて天下の秋を知るものである。

從來獨逸の陸軍は世界最強のものだと思はれて居たけれども、其の實は必らずしも然らず。ウイルヘルム二世は外交に於いて失敗せると同樣に、陸軍に於いても失敗して居る。其の理由は第一に帝が英國に對抗せむとして海軍擴張にのみ力を濺ぎ、陸軍を等閑にしたことである。第二は帝が宰相や大臣の言を容れず、萬機を一身に握り、自ら陸海軍の總司令官となり、同時にモルトケ將軍の甥を親任して將軍たらしめ、モルトケ將軍の忠告を容れずに我意を通したことである。

そこで一九一一年摩洛哥事件が片附くと、獨逸は大急ぎで陸軍の新編成にとりかゝり、武器の改造、要塞の改築に忙がしく、一九一二年には四億七千二百萬圓、一九一三年には五億四百萬圓、一九一四年には八億三千五百萬圓を此れに費やした。併しながら陸海軍は漸次に有機的發展を遂げる性質の機關であつて、然う一夜潰けに、急激に改良さるべきものではない。水のやうに金を費やしても、永い間打棄て置かれたものが、忽然として有力なる機關となり得ることは望めない。黃金で軍隊の精神と指揮官を製造することは出來ぬ。黃金は指揮官に先見を與ふることも出來ず、又不備な組織や誤謬に充ちた軍略を改むることは出來ない。そこで陸軍改良の企ても單に外觀に止まり、內部に亙れ

る根本的改造については舊態依然たるものであつた。

凡そ外交と戰爭の勝利は愼重、勢力の集注、綿密なる努力の賜物である。愼重と綿密とはウイルヘルム一世及び當時の名臣の特質であつたが、ウイルヘルム二世及び其の重臣連は皆奢侈、尊大、虛飾の權化で、普魯西式の道德は地を拂つて空しく、丁度田舍ものが都會摺れがしたと云ふ有樣であつた。普魯西はすなはち軍國主義の本場であるけれども、當初の軍國主義は精神上の强味を持つた軍國主義であつた。それが强味が無くなり、軍國主義の弊風ばかり殘つて終つたのである。精神が缺亡せる軍國主義は實に危險なるものである。そこでビスマークは斯る空虛なる軍國主義の上に、侵略政策を樹つることの危險を思ひ、切に此の惡風潮に反對した。ナポレオン配下の佛國が亡びたのは、すなはち空虛なる軍國主義の賜ものであると喝破したが、彼れの言は終に聞かれなかつた。

ウイルヘルム二世を首班とする獨逸政府は、斯くして武力によつて外交內政の諸問題を解決し得べしと爲し、此れを實行した。彼れらは力によりて波蘭人、丁抹人、佛蘭西人を征服し得べしと考へた。彼れらは力によつて國內に澎湃たる民主主義の波を遮ぎり得べしと考へた。彼れらは力によつて國民の意志は何うでも

左右出來るものであると考へた。議會なども皇帝の命のまゝに動かなければ、解散さへすれば此れを統御し得ると考へた。然して此の『力の福音』を宣傳するや、皇帝自身大童となつて力戰奮鬪した。政治家を以つて超人的となし、皇帝を神の小なるものと信じた獨逸人は、皇帝等の目的とする領土の擴張が自己の胸中に於いて共鳴する何ものかを有するを發見して、或る程度まで此のプロバガンダに參加した。彼の尨大なる海軍同盟の出來たのも此の共鳴心理の結果である。海軍同盟會の向ふを張つた陸軍同盟會乃至空中同盟會が出來て、盛んに政府の提灯を持つたのも、此の心理作用が與かつて力ある。更に目的と規模の此れらの同盟會よりも非常に尨大なる汎獨同盟と云ふのがある。ウイルヘルム二世即位後三年に創立せられたもので、全歐洲、全世界の獨逸化を主張した。彼れらの手に成る獨逸文學は未來の戰爭を描き、幾百の小說は獨逸の青年に、如何にして佛國や露國を征服するか。又如何にして英國の艦隊に打勝ち、如何にして印度を英國に反抗して起たしめるか。更に如何にして合衆國の尊大を懲し其のモンロー主義を引き裂くべきかと云ふことを敎へた。此の叫びは將軍や、司令官や、敎授や、講演者や、著述家や、記者などによりて反響され、獨逸が野心に燃ゆる、恰かも蟬が其の毛を逆立て

た時と同樣の感を世界に與へた。

如上の芝居を打ちつゝあるウイルヘルム二世は、自分の目的が獨逸の利益となるべきことを信じて疑はなかつた。獨逸人も大たい此れに共鳴した。唯如何にせん、帝は此の大芝居を打つべく、力量に於いて大いに不足して居つた。そこで芝居が大規模なるだけ其の失敗も大規模なるを免がれぬ。今回の戰亂の結果がすなはち此の大芝居の結果である。

ウイルヘルム二世は其の衝動的政策によりて失敗し、國民は帝の言行の相伴はざるを看破し、漸次其のプロバガンダに乘せられたるを悔ゆるに至れるが、歐洲の諸國は獨逸に對して警戒の眼を睜るやうになつた。內に人望を失なひ、外に警戒を增すは何たる愚策であらう。然かも諸强の獨逸に對する警戒が强くなり、獨逸は外交的には始んど手も足も出でざるやうになると、國民は茲に煩悶を始めた。三國同盟を打破すべしなど云ふ叫び聲は、此の煩悶の證左である。歐洲の均勢を支持する三國同盟を打破すとは、一見妙に考へられるが、此れを露骨に云へば塊匈國就中塊多利を併呑して終へと言ふ意味である。此れは列國の警戒が嚴重にして、到底他に志を伸ぶることが出來ないから、思ひ餘つて友喰ひを斷行せよと云ふものである。例のベルンハルヂー將軍は此の主張の代表的人物で『獨逸は三國同盟を破り、列國の均勢を碎いてのみ能く其の安泰を期し得』などゝ云ひ、汎獨同盟の連中は盛んに大獨逸の建設を云々し『獨逸はハムブルグからトリエストまでを占領するのみならず、ハムブルグから君府まで否海峽を越えて彼岸の地域を併合せなければならぬ』と主張したのである。此れは小亞細亞からバグダッドに出でゝ波斯を衝き、印度を脅やかさんとするもの。然して一面に於ては埃及を掌中に握つてスエズ運河を壟斷せんとするものである。實に壯圖と許するを妨げぬが、併しながら斯る壯圖が、他に伸ぶるの機會なきに苦しんで、塊多利を縊り殺さんとするものなるを解する時、此の雄大なる聲はすなはち獨逸外交の斷末魔の聲と聞かる。

然るに獨逸が斯る野望に動いて居た時、當の敵たる塊匈國は同じく南下の策を樹て、巴爾幹半島の女王となりサロニカ港を吾が所有たらしめんとして居た。だから巴爾幹戰爭の破裂を今か〳〵と待ち詫び戰爭の隙を狙つて之を平定し、或は平定せずとも半島の疲弊に乘じて、少くともサロニカを失敬せんと決心して居た。此の塊匈國の野心に對して障害となるべきものは、其の南下の途を遮ぎつて居る

塞維である。ヴアルダルの谿谷は自然の大道を形ち造り、維納からブダペストに行くにも、またサロニカから君府に出るにも、ヴアルダル谿谷を通ずると實に容易である。然して其の交通の衝に當るヴアルダルは、塞維の中央に横たはつて居る。そこで塞維は墺匈國に取つては眼の上の瘤である。此れは何んとかせなければならぬと墺匈國が考へた。

然るに墺匈國の待ち設けた巴爾幹戰爭は、巴爾幹諸國の方が勝ちを占め、茲に兎も角も嚴たる數個の獨立國が出來て終つたから、墺匈國に對する南下の障壁はますく高くなつて終つた。就中眼上の瘤たる塞維は君府への通路を確實に塞ぎ、茲に墺匈國をしてイージアン海經由ボスフオラス海に入らざるを得ざらしめた。そこで塞維が發展しイージアン海にまで出て來ると、此れは墺匈國に取りて唯一つしかない君府への通路を遮斷される結果になる。此に於てか何うしても塞維をイージアン海に出してはならぬ。墺匈國はいろ〳〵考へた末、塞維人が墺匈國の領事プロカスカに危害を加へたと云ふ事件を僞作して、此れを楯として塞維を壓迫せんと試みた。然るに此の時意外な密電が、露都から塞維政府に致された。露國外相サゾノフ氏は塞維に告げて云ふ『墺匈國が塞維を攻める

ことは、同時に露西亞を攻めることである。露西亞は塞維の獨立を翼ふことゝ、さながら英國が白耳義の獨立を翼ふのと同じである』と。換言すれば墺匈國が塞維に向つて戰端を開かば、露西亞をも相手にしなければならぬと云ふにある。

ビスマークを免官せしめたウイルヘルム二世は自らの宰相となつて、手腕と經驗の無いカプリヴイ將軍の如きを登庸して居たが、果してビスマークの憂慮に違はず、一歩〳〵破滅の危險へと陷つて來た。如上塞維と墺匈國間の危機が發生するや、ウイルヘルム二世はフランツ・フエルヂナンド太公と協同行爲の契約を取り結んだ。すなはち獨逸は塞維を攻めむとする墺匈國の味方たることを盟つたのである。塞維を露國が助ける代りに、墺匈國をば獨逸が助けんとするのである。露西亞は此れを聞いたけれども、退くことは出來ない。何となれば露西亞が尻込みするは、此れ露西亞が巴爾幹半島に在るスラヴ人種の間に信用を失する所以。また墺匈國をして塞維を一貫してサロニカ及び君府に出でしめ、斯くして露國黑海の門戸を封鎖せしむる所以であるからである。そこで何うしても露西亞は一歩も退ぞくことが出來ぬのであるが、併しながら露國が退ぞかなければ、何うしても獨逸と墺匈國とを相手として戰爭せなければならぬ。戰爭が起るとして、英國

は塞維に對しては餘り利害關係を持たぬから、中立的態度を取るだらうが、萬が一英國が塞維側となつて戰爭に參加することになると、獨逸側には必らずや伊太利が起つて來るに相違ない。然うなると佛國も何うなるか分らぬ。斯くして簡單なる一塞維問題が歐洲の禍亂を捲き起す。時局は頗る重大となり、緊張の密度は段々に加はり來る。斯る所にフエルヂナンド太公の暗殺事件が突如として起つた。實に此れ火に油を注ぐものである。暗殺の數週間前ウイルヘルム二世はコノビシト城に太公を訪ふて密談するところがあり、中歐兩帝國に取つては頗る好都合であるから、一つ露西亞を叩きつけようと云ふ相談をしたのである。茲に起つたのが暗殺事件であるから、中歐帝國に取つては喧嘩の道具立ては申し分なく揃つたと云ふべきである。

太公暗殺の後墺匈國は不思議にも數週間の沈默を守つた。蓋しウイルヘルム二世から掛けられた露西亞討伐の決心が付きかねたものらしい。此の間ウイルヘルム二世が厄起となつて墺匈國政府を煽動したのは、其の後に至つて明白となつた事柄である。そこで墺匈國も終に最後の決心を爲し、着々と準備を整へた。墺匈國がいよ〳〵最後の手段に出ると云ふことは、英國政府には一九一四年七月

二十日もしくは十九日に分つた。然るに其の後二日すなはち二十三日となるや、墺匈國は何らの豫告もなく兵を塞維に進め、四十八時間内に統轄權を棄てゝ吾が國の屬國となれと、塞維政府に對して脅迫狀を投げ付けた。

當時英國は愛蘭問題があり、内亂は避くべからざる狀態になつて居た。そこで墺匈國がいよ〳〵塞維に挑戰するの明白となるや、王は大急ぎて各政黨の首領をバツキンガム宮に招いて協議したが、此の協議會では英國の政治家もまさか世界戰爭にならうとも思はず、遠方の火事位のところで、成るべく事勿れ主義を採るといふ方針に出でた。此れが獨逸の附けめであつたのである。獨逸は最初から愛蘭問題があるから、英國は到底塞維問題に容喙する能力があるまいと考へて居つた。況んや愛蘭は歴史を持つて居るから、愛蘭問題がゴタ〳〵して居る以上、英國は局外中立を守るに相違ないと高を括つて居た。然して露西亞は饑饉の爲め國が荒れ、佛國は大統領も總理大臣も外國に旅行して居ると云ふ有樣である。だから獨逸は墺匈國の尻押しをすると觸れたならば、露西亞は戰はずして白旗を樹て、塞維問題は自分の有利に解決されることゝ信じて居た。此の邊がウイルヘルム二世の己惚れと淺薄なところを遺憾なく暴露するものである。

然るに英國の態度は日を經るに從がつて硬論に傾いて來た。英國政治家の内にも獨逸に打擊を與へるには非常なる好機會であるから、此の際一つ奮發して見ては何うかと考へる者もあつた。此れに加ふるに獨逸の政策が益危險視され、露國と佛國と英國との間には、中歐兩帝國に取つて不利益なる密接なる關係が進められた。獨逸は尚云へるが如く、英國が中立を守るものと誤解して居た。英國の最初の態度はウイルヘルム二世の考へが、必らずしも誤解でないことを證據立てたが、英國のやうに流動的政策の國——換言すれば定見なき國——を常に一所に定住して動かぬものと考へたのが非常なる違算である。そこで英國の態度が硬(七月三十日に決定)くなつて來ると、獨逸は少々當てが違つて來た。獨逸に使嗾された墺匈國も大に當てが違つて來た。英國が戰爭に仲間入りをすると、此れは少々手剛い敵である。佛國も恐らく露國方になるであらう。斯うなるが事が少々面倒である。そこで墺匈國は俄かに態度を變じて、別に戰爭に意ある譯ではないから、露國と相當條件にて和解して差支えないと云つた。斯くの如く墺匈國が俄かに軟弱の態度に出でたと云ふことは、獨逸が眞に墺匈國を援くるの意なく、單に傀儡として墺匈國を操つて居たものであると云ふことを語る。すなはち獨逸は

墺匈國の爲めに一肌脫ぐと云ふ考へは、毛頭無かつたのである。獨逸から云へば自分の戰爭に墺匈國を引つ張り込むのは自然であるが、弱い墺匈國の爲めに、自分が戰爭に引つ張り込まれるのは眞平御免であると考へて居たのである。

併しながら又一方から云ふと、墺匈國が斯くの如くに屁古垂れて終つては、元も子も無くなつて終ふ譯である。自分の野心を遂げる機會も無くなるし、露西亞を叩きつけることも不可能となる譯である。そこでいよ〳〵墺匈國の黒幕であつたウイルヘルム二世は茲に淺黄頭巾を脫いで、自分が主人役として舞臺に躍り出でた。墺匈國が緩和し、露西亞も七月三十日を以つて軍隊を引き上げると宣言したに拘はらず、ウイルヘルム二世は突如として露西亞に對し、十二時間以内に軍隊を引き上げよとの最後通牒を送つた。更に帝は『ローカル・アンツアイゲル』紙をして獨逸は軍隊の動員令を發したと云ふ虚構の記事を大書せしめた。伯林駐在露國大使は早速之れを本國に打電した。然るに獨逸政府は『ローカル・アイツアイゲル』の記事は全然虚構であると云ふ否認を爲し、また同紙をして取消文を揭げしめた。露國大使は又もや獨逸動員は事實にあらずと云ふ急電を本國政府に向つて發した。然るに獨逸政府は前の動員令下ると云ふ電報は、大急ぎで露都に送つた

に拘はらず、二回目の電報すなはち動員は事實にあらずとの電報は、此れを押へて終つた。だから露國政府は獨逸は眞に動員せるものと誤解し、軍隊引上げの命令を中止し、さらに大々的に獨逸國境に向つて動員した。ウイルヘルム二世は此れを見て眞紅の舌を吐き、露西亞は我に向つて挑戰せり、獨逸國民は祖國を守る爲めに起たざるべからずと宣し、茲に世界大戰の幕は、塞維にも墺匈國にも關係なく、獨逸と露西亞との間に切つて落とされた。

然らばウイルヘルム二世は何故に自國と歐洲とを禍亂の中心に投げ込んだか。それは主戰黨の意見に動かされたからでもあつたが、大なる理由は從來の外交上の失敗をば今こそ雪がんとして起つたのである。上流階級に屬する政治家や、皇帝の家族などは、第一回、第二回の摩洛哥事件に皇帝が失敗したことを切りに憤慨して居た。彼等は第三回の失敗は、獨逸の致命傷となるものなれば、斷じて三度の失敗を繰り返へしてはならぬと敦圍いて居た。そこで墺國太公の暗殺を機會として、一の雪恥戰を思ひ立つたものである。七月三十一日ウイルヘルム二世が宮殿露臺から群衆に向つて爲した演說は、獨逸が存亡の危機に立つて居ると云ふ意味を述べて居るが、帝は自身寧ろ勝算歷々と己惚れて居たのである。此れは帝は

無論惡いが、斯る危險なる途を步ましめた軍閥も責任がある。此の夜帝は露臺から演說して云ふた。『生か死か、獨逸は此の二つの內一つを撰むべき時に逢着す。四圍の敵は吾人に正當防禦をなさゝるを得ざらしむ。吾等は劍を執らざるを得なくなつた。戰爭は財產と生命との大犧牲を必要とするが、獨逸と戰へば總て斯くの如しと云ふ實物敎育を吾人の敵に向つて示さなければならぬ。諸君願はくば神に祈れ。敎會に於て、神の前に跪まづき、神の助けを祈れ。獨逸の勇敢なる軍隊の爲めに祈れ』。帝の此の言葉には、何となく悲慘なる最期の響きが聞える。ビスマークありせば斯る自殺的戰爭には斷じて同意せなかつたであらう。

ウイルヘルム二世が露西亞に軍隊を差向けた時、獨逸の地位は決して帝の考へるが如くに、安全なるものではなかつた。假し獨逸は墺匈國と同盟して、陸上の戰爭に勝ち得るとするも、海には英國と云ふ大敵が控えて居る。然して若し獨逸と墺匈國とが失敗すると、此れに乘じてチロルや、トレンチノや、トリエストを取戻さんが爲めに墺匈國に攻め入る事を辭せざる獅子身中の虫、伊太利が居る。英國が動けば、同盟國の日本も動かねばならぬ。終には米國も動かねばならぬ。此れで何うして勝算があるか。

尤も獨逸が露國に對して宣戰した時は、例の流動的なる英國は、墺匈國對塞維問題が突如として獨對露の夫れと變化したので、暫時茫然として爲す所を知らずと云ふ有樣に陷つたのは事實である。併しながら此れを英國は中立を守ると、強ひて自分に好都合に曲解したのは、重ね〳〵ウイルヘルム二世の落度である。英國をば中立を守るべく十分に牽制し得るものと考へて、英國の國防第一線たる白耳義とルクセンブルグを侵したのは、殆んど狂暴の沙汰である。ウイルヘルム二世は餘りに自分を偉大に評價する結果、英國をば餘りに見縊つた。佛國の東部に堅固なる防備あり、獨逸は中立國たる白耳義を突破して佛國に侵入せんとしたのであるが、中立國白耳義を侵す理由を三回も變更して發表したなどは、頗る人を馬鹿にした話しである。如何に神經遲鈍の英國と雖も怒らざるを得ないやうな仕掛けになつて居る。然かも獨逸は尙ほ英國は中立を守るなどゝ考へ、英國に贈賂を試みたりなどした。蓋し獨逸にウイルヘルム二世ありてビスマークなく、軍人ありて政治家なきの致すところである。劍客は劍に死すと云ふが、ウイルヘルム二世は策によりて仆れ、序でに獨逸國民を屈恥に引つ張り込んだのである。

第二十四章　社會民主黨の分裂

一九一二年の總選擧以來社會民主黨の勢力は着々として發展し、此れと共に政府の壓迫も正比例を以つて强大となつた。社會黨は叫んだ。『我れ〳〵無產階級は現在の國家く、單に時期の問題となつた。革命若し起るあらば、我れ〳〵が此れによつて失ふ組織に何らの興味を有せぬ。革命とところは、單に我れ〳〵を縛する鐵鎖のみ』と。爲政者と被政者との反目が斯うなつては、革命が起るより外に途はない。折しも一九一四年七月、墺多利が最後通牒を塞維に送り、此れを導火線としてウイルヘルム二世は全歐洲を兵火の裡に包んで終つた。蓋し岌々乎たる國內の人心を外に轉換して、危きを救はんとする策略も交つて居た。初め墺多利が最後通牒を塞維に送るや、すなはち三國同盟の義務が獨逸に於いて議論せられた。此れに對して社會黨の態度は、塞維に對する墺多利の最後通牒は、畢竟領土慾の滿足を得んとするにある。斯る不祥なる出來事のために、獨逸人は一人なりとも血を流す必要はないと云ふに在つた。更に彼らは態度を別の方面から說明して、其の機關紙『フォルウェルツ』(七月二十六日)に於い

て『墺多利の塞國宣戰は獨逸の同意なくして行へるものなるが故に、獨逸人は此れを援助するの義務なし』と述べた。此れは社會黨の最初の態度から見ると、餘ほど異なつて居る。最初は獨逸の態度などは眼中になかつた。墺多利の態度は領土慾から出たものであるから、此れを助ける必要はないと云つた。それが『フォルヲエルツ』紙上では、獨逸政府が同意を與へたならば事の善惡に拘はらず墺多利を助けると云ふやうな態度が見える。此れは社會黨としては一寸妙な態度と云はなければならぬ。併しながら此の頃は獨逸政府は既に歐洲を砲火の中に引つ張り込む決心をして居たから、社會黨の頭株を呼んで若し露西亞が墺多利に對して起つならば、獨逸も墺多利の爲めに起たなければならぬと云つた。此れに對してハーゼは今回の事件は元と墺多利が塞維に進んで宣戰したものだから、此れを防衛戰と見ることは出來ぬ。從がつて獨逸が墺多利を助くるは謂れなきことであると答へた。然るに政府は單に、斯る見解を懷くは社會民主黨あるのみであると云つた。談判は此れで物分れとなつたが、社會黨は此の會合に於いて明らかに政府の態度を感知した。そこで政府を牽制すべく、到る所に大會を開いて示威運動をやる事に着手した。七月二十八日伯林市中に二十八ヶ所の人民大會が開かれた

のが其の例である。

社會黨の活動は人民大會に止まらず『フォルヲエルツ』紙上(七月二十九日)で英國の調停に耳傾けざる獨逸政府の態度を攻撃し、若し此の爲めに戰爭とならんか、社會黨は宜しく國民の永久的動員を行なひ、獨逸政府に對抗すべしとさへ高唱した。然して更に七月二十九日から三十日にかけて、萬國社會黨大會がブラッセルに開かれ、英、佛、和、獨、墺匈、伊、露、波蘭、瑞西、丁抹及び西班牙の諸國の代表者が此れに參加し、獨逸よりはハーゼ自ら出馬して、開戰の罪は獨り墺多利にありと云つた。然るに其の翌日七月三十一日には、獨逸政府は獨逸が戰時狀態にあることを宣言するや、獨逸に於ける非戰論者の行動は當局に威脅せられて中絶し、さしもに强硬と見えたる社會民主黨すら、我等は兎も角も戰爭に反對したり、我等は戰爭に對して責任なきものなりと、妙な申し譯を繰り返すのみで、態度はガラリと變つて終つた。社會黨の豹變は實に間髮を容れざる底のものであつた。機關紙『フォルヲエルツ』八月一日)が黨員に對して言動の輕卒を戒めたるが如きは、其の數日前の態度と比較して、實に非常な變り方であると云はねばならぬ。換言すれば一九〇七年に負けて一九一二年に勝つた民主主義は、茲に再び負けて軍閥の爲めにシテ遣られたもので

ある。彼れらがシテ遺られたる大なる記念は、八月四日彼れらが協賛を與へたる第一次戰費として殘つて居る。政府に對する國民の永久的動員は抑も如何となれる。

此れより先き八月四日、政府は五十億馬克(二十五億圓)の戰費を議會に提出すとの報傳はるや、社會民主黨は八月三日を以つて社會黨議員百十名を召集して其の態度を決定せんとした。異議百出なか〳〵意見の一致を見ないと云ふことは、既に社會黨の內部が一致して居らぬことを語り、政府操縱の容易に成功すべきを思はしめる。機を見るに敏なる政府は宰相ベートマン・ホルウエッヒの名によりて、各黨の頭株を招き翌日提出せらるべき軍費について了解を求めんとした。社會民主黨からはハーゼ、シャイデマン、モルケンブールの三名が出席した。宰相は說いて曰く『獨逸は好んで戰爭の渦中に投するものではない。併しながら露國の鐵騎は今や長驅して祖國の東境を侵しつゝある。諸君は獨逸が野蠻極まる專制國に蹂躙さるゝを容し得るか。獨逸亡びては諸君の主義も主張も何の用をか爲す』と。露西亞が獨逸に對して動員せることは、此れ一に獨逸政策の奸策である。奸策を用ひて露をして先づ動員せしめ、防衛戰と云ふ形式の下に、政府は社會民主黨を說き落したるなり。內部の不平を外に轉せんとして掛れる戰爭は、先づ其の出發點に於いて甚じき成功を收めたのである。併しながら社會黨中にも純理によりて動かんとする少數がある。リーブクネヒト、リユーレ、ヘンケ、ヘルツフエルド及びカール・カウツキーに師事するもの數名合計十四名此れである。斯くて八月三日の社會黨議員會議に於いて、此れら十四名が反對の投票を爲し、七十八名が贊成の投票を爲した。總裁ハーゼまた少數黨の一人である。

斯くて八月四日いよ〳〵五十億馬克の戰費案が上程せられ、社會黨は其の首領ハーゼによりて此れに對する立場を宣明した。すなはちハーゼは個人としては反對するも、黨の決議として社會黨は政府を援助し、其の豫算案を通過せしむべしとの決議を朗讀した。そこで社會黨は八月三日の黨の會議では反對なりしものも黨の決議を重んじて、全黨一致して贊成の投票を爲した。カール・リーブクネヒトも贊成の投票をなした。然して社會民主黨中の錚々たるものドクトル・ルードウイツヒ・フランクは議會閉會の後第一番に戰線に起つて、間もなく佛國のバッカラーに於いて陣歿した。

此に於いてか世人は一齊に意外の感に打たれた。社會黨は此の千載一遇の好機に於いて、所謂國民の總動員を行ひ、以つて政府に壓迫を加ふべしと考へて居た

人間は、豫期に反して社會黨の軟化振りの餘りに鮮やかなるに、開いた口は閉がらなかつた。又此れに反して社會黨を以つて國家の敵と爲し、國民を裏切る者と罵倒した居た連中は、何あんだと云つて寧ろ社會黨を冷笑を以つて迎へた。只喜こんだのはウイルヘルム二世と此れを圍繞するところの軍閥である。社會黨も御するに方法を以つてすれば、存外與みし易いものであると手を額にして相慶賀し、カイゼルの如きは『我れまた政黨なるものを見ず』と傲語せるほどであつた。そこで政府の社會民主黨に對する態度も頓に一變し、ヴユルテムベルヒに於いては、社會民主黨員が開闢以來初めて高等學校教授に任ぜられる。勞働組合に對する總ての法律的制限は撤せられる。普魯西に於ける選擧法も改正すると云ふ約束を與へられる。政府の社會黨に對する態度は戰前とは全く別人の觀がある。すると又社會黨は社會黨で誠意を以つて政府を助けた。特に政府對勞働問題に對しては、全國の勞働組合其の他の團體に命令して、政府を困難に陷れるやうな問題を惹起せざらしめた。然して中立諸國の獨逸に對する態度漸く緊張するを見るや、社會民主黨はそれら諸國の社會主義者に使節を派して獨逸の立場を辯明せしむることによりて、中立國の輿論を牽制せんと努めた。すなはちスーデカムは伊太

利、羅馬尼に、ヘルブハンドは勃牙利及び土其古に、然してスーデカムは再び瑞典に、シヤイデマンは和蘭に使ひして、何れも其の國の社會黨を通じて輿論を牽制せんとした。此れは一九一四年末のことである。社會黨の政府に盡すこと至れり盡せりと云ふべきである。

然るに斯くの如き狀態は長くは續かなかつた。社會黨本來の立場から云へば、己れを殺して政府の爲めに盡しつゝあるものであるが、此れは獨逸は防禦戰に從事して居ると云ふこと、及び獨逸はやがて勝利を得ると云ふ期待があつて、始めて可能の事件である。然るに日を經るに從がつて戰爭の張本人は何うやら獨逸政府であるらしいと云ふ事が、薄々分つて來ると、社會黨は賣られたなと云ふ感じが自然に湧いて來た。併しながら賣られても買はれても、戰爭に勝ちさへすれば問題はないのである。それがマルヌ戰が失敗に終り、獨逸の陸軍も彼れらが最初信じたりし如く、天下無敵ではないと云ふ事が分ると、熱に浮かされて居た社會黨も一寸考へるやうになつた。すなはち八月四日の熱病の反動が兆した。此の機會に於いて元來から社會黨の態度に反對なりし十四名が擡頭して來たのである。先づ院外の一味中カール・カウツキー、フランツ・メーリング等は八月四日の社會黨

の戰費協贊は、社會黨としての一大失策なりとて非難を加へ始めた。此れは今更カウツキーなどが叫ばんでも分つて居ることである。變節を云ふなら八月三日に於いて其の態度を決し、屑よく社會黨から脫すべき筋合のものである。それを最初は彼れらもウイルヘルム二世と同じく矢はり誇大妄想に囚はれ、敵は一蹴して止めを刺し得と考へて浮か〳〵して居たのであるが、扨て實際に當つて見ると、事件が註文通りに進行せぬものだから、此れでは行かぬと本然の我れに立ち還つたものである。併しながら斯う云ふ議論が出て來るやうになると、社會黨の足並みは亂れて來るから、そこで機關新聞編輯者會議(十一月)が開かれ、同一の步調を取る目的を以つて下のやうな決議が通過せられた。

(一) 我れらは侵略主義及び粗笨なる愛國主義に對して戰ふ。

(二) 我れらは領土併呑の慾望に對して戰ふ。

(三) 補虜又は負傷兵の敵軍暴虐の見聞を紹介する時は、出來得る限り客觀的に觀察し、誤報又は誇張に陷らざるやう努力す。

此の決議は八月四日前後の社會黨の態度とは、餘ほど違つて居る。八月四日前後は社會黨は無條件的に愛國的精神を振り廻したものである。それが今や覺醒

して、政府に旨從するものにあらずとの態度に變つて終つた。換言すれば社會黨が政府に愛想をつかして終つたものである。

社會民主黨の中央機關紙『フォルウエルツ』は其の首腦者が多く少數黨側の人物であつたから、兎かく社會黨全體の態度に對して、批評がましき言論を掲載し來つた。それが前掲の決議があり、批評がます〳〵露骨となつて來た。全黨の總裁フーゴー・ハーゼは前述の如く最初から多數黨の政策に反對して居たが、全體の形勢が動くにつれて彼れの勢力は日一日と上つて行つた。それに『フォルウエルツ』が形勢を煽動する。獨逸の旗色は兎角振はぬと來て居るのだから、政府反對、社會黨反對の運動はます〳〵盛んとなつた。伯林、ゴータ、ブレーメン、ライプチッヒ、ハムブルグなどでは盛んに不平會が催ほされた。するとウユルテムベルヒに於ける社會民主黨の支部は其の機關紙たる『シユウエービッシエ・タッハワハト』の編輯員一同を免職して終つた。此れは同紙が『フォルウエルツ』紙と同じく、社會黨の政策を攻擊したからである。一たいウユルテムベルヒの社會黨の政策に對する反對は、決して新らしいものではない。其の首都シユタッツガルトは實に反對運動の陳呉を以つて推すべきものである。それは第一次戰費案が通過して間もない八

月二十一日のことである。シュタッツガルト市の重もなる社會黨員は本部の採れる政策は社會民主黨を殺すところの自殺的政策である。我れらは此れに反對であると云ふ申合せを爲した。然るに九月になるとカール・リーブクネヒトが來り、八月三日に於ける社會黨議員會に於ける模樣を巨細に物語り、此れが火上さらに油を注いだ。だから九月二十一日に催ほされたる社會黨の會合では、地方領袖の一人ウエストマイヤーは激越の口調を以つて、社會民主黨が其の責任を盡したならば、戰爭は防止せられたであらうと卓を叩いて論じた。すなはち伯林に於ける社會黨本部特に社會黨議員に對する不信任演說である。斯んな次第で『シユウエーピッシエ・タッハワハト』は自然に社會民主黨の攻擊機關と化し、其の結果前述の如く社會黨からクーデターを喰つたのである。

斯うなると社會黨內に於ける兩派の反目は、殆んど底止するところを知らぬ。然してお互ひに惡聲を放つて居るうちに世間でも此の事實に氣づき、終に和解の機會は去つて終つた。兩者の色分けがます〳〵濃厚となつて、エドウワルド・ベルンシュタイン、アイスナー、エルドマン、ヒルフエルヂングなどの名士が相次で反對少數黨に加はつた。然して一方に於いては戰前左黨に屬して居た議員中新たに

國民黨に改宗せる者もあり。その中殊に注意すべきは經濟學及び人類學の權威『ハインリッヒ・クーノウ』と曾て極端なるリーブクネヒト派たりし『ライプチーゲル・フオルクスツアイツング』紙の主筆ポール・レンシュがある。すなはち獨逸の政界は社會黨守舊派と社會黨刷新派を二つの中心として、廻轉するの形勢を生み出した。

一九一四年十二月獨逸政府は新たに五十億馬克（二十五億圓）の軍事公債の協贊を議會に向つて求めた。社會民主黨は再び會議を開き贊否を決したが、今回は反對少數黨の數は八月三日の十四名から十七名に增加した。併しながら八月三日通りに、自身反對なるハーゼは依然全黨の宣言を朗讀することゝなつた。少數黨の一人なるカール・リーブクネヒトは單獨で戰時公債に反對の投票をなさんことを乞ふたが許されず、結局十二月二日の議會に於いて社會黨は再び全黨一致の形式を以つて政府の要求を可決した。然るに彼のリーブクネヒトのみは單獨行動を取り、今次の戰爭は畢竟獨逸の帝國主義的征服戰なりとの覺書を議長に送つた。議長ケンフは無論此れを議事錄に登載することを拒んだけれども、斯んなことは リーブクネヒトに於いて先刻御承知である。そこで彼れは覺書を印刷に附して 遍ねく知人に配布し、寧ろ議事錄に登載する以上の效果を收めた。リーブクネヒ

トは黨の申合せを破つて此の擧に出でたのであるから、公々然と社會民主黨守舊派に挑戰したものである。多數黨少數黨の分裂はます〳〵近くなつて來た。此の餘波はまた普魯西議會にも及び、茲ではリーブクネヒトの一派すなはち帝國議會に於ける少數黨は、多數黨として屢々政府を虐めた。

社會黨の多數黨少數黨が明確に分裂を來したのは、獨逸政府が第三次の軍費を議會に要求（一九一五年三月）した時に在る。在來二回の支出は臨時費として提出可決せられたのであるが、今度の百億馬克（五十億圓）は帝國豫算の一部として編入せられてある。例によつて社會黨では會議を召集して、新豫算に對する態度を附議したが、贊成六十九名反對三十名となつた。すなはち反對黨が漸次優勢となりつゝあるを見る。三月二十日いよ〳〵豫算案の附議せらるゝや、少數黨の一人ゲオルグ・レーデブールは議場に於いて少數黨の所見を述べ、之に對して多數黨はフイリップ・シャイデマンをして反駁を加へしめた。此れでは社會黨は全然相反する二個の陣營に分裂して終つたものである。そこで投票と云ふ場合になり、リーブクネヒトは前回同樣に反對の投票をなし、オットー・リューレまた此れに從つた。社會黨會議に於いて豫算に反對した三十名の少數黨は、投票の行はるゝ前に一齊

に議場を引き上げ、投票の決に加はらなかつた。此に於いて少數黨を非愛國者と呼ぶ聲と、多數黨は政府の傀儡なりと呼ぶ聲とが交り、此れに政府側のプロパガンダが交り、議論實に鼎沸。國民は歸趨に迷ふの狀態に陷つた。

斯う云ふ紛々擾々の狀態のうちに二箇月を經過し、五月に至りて帝國議會は開かれた。本來の成行きから云へば、少數黨はます〳〵勢力を得、多數黨は不振の狀態に陷るべきものであるが、實際は寧ろ其の反對の狀態を呈した。それは伊太利が三國同盟を棄てゝ、協商國側に趨つたからである。伊太利が三國同盟を去るのは既定の事實で、トリポリ戰爭以來期待されたること。更に驚ろくべき出來事ではないが、獨逸政府は此れを有力に利用した。斯くの如く國步艱難の時に當つては、獨逸は上下一致外敵を擊退することに全力を盡さなければならぬ。國內の鬪爭は夫れから談合したら宜からうと云ふやうにプロパガンダをやり、國民も戰爭は振はず、今また伊太利に逃げられたと云ふので少々悲觀し始めたので、社會黨の多數と少數との爭ひは一寸中止の姿となつた。五月二十八日ハーゼに代つて社會黨の代表者エーベルトは議會に於いて、戰爭開始當時に於ける社會黨の宣言すなはち社會黨は飽くまで國家に忠なるべしとの意味を繰り返して述べ、但し無併

合の平和を希望すと述べた。此の無併合の平和を提唱せることは、獨逸は領土擴張の爲めに帝國主義の戰爭をして居るのではない。單に防衛の爲めに戰つて居るのであると云ふ結論を爪めかしたもので、要するに政府の爲めに御用を勤めて居るのである。シャイデマンもまた無併合を唱へ、此れを基礎として少數黨との妥協を劃策した。無併合主義に對しては汎獨主義者などの猛烈なる反對者があり、此れを敵とする上に於いて少數黨は多數黨と提携するを便とする。此れに如ふるに前記の如く伊太利は逃げを打つ。少數黨も暫時雌伏せなければならぬ破目に陷つた。

然るに一方政府は少數派の擡頭を見て快よからず、在來社會黨に對して示し居たる寬容の態度を棄てゝ、漸やく壓迫政策の昔に逆行した。此れは一九一五年の春ごろのことである。斯る場合斯る政策を採ることは常に籔蛇である。併しながら政府は壓迫によりて少數黨を押潰し得べしと考へた。斯くて五月一日の勞働日に於ける各地の集會は禁止せられた。五月十五日ドレスデンの近郊に於ける三十ケ所の集會も禁止せられた。六月九日ハーゼがデユッセルドルフに於いて試みんとせし『社會民主主義の過去及び將來』と題する講演も禁止せられた。六

月十四日ブレーメンに於いてハーゼが出演する筈なりし會合も、アルトナの指揮官より必要なる許可を與へられなかつた。また六月十二日には一隊の警官がデユッセルドルフに於ける社會民主黨の印刷所を襲ひ黨員の一人は家宅捜索を受け且つ逮捕せられた。斯くの如く政府が社會民主黨少數を迫害する結果、彼らは瑞西の社會黨新聞『ベルナー・タッハワハト』に寄稿して、多數黨を攻撃すると云ふ窮手段を撰まざるべからざるに至つた。併しながら斯くの如く少數黨を窮境に陷いるゝことは、結局彼れらを驅つて極端なる思想を懷かしむる所以である。

六月九日議會に於ける少數黨議員アルブレヒト、ヘンケ、ヘルツフエルド、クーネルト、レーデブール、リープクネヒト、リユーレ、ジユワルツ、ジユタットハーゲン、シユトルレ及びフオグトヘールの九名其の他約百名の名を以つて『全黨の總裁竝びに院内團の首領に與ふる公開狀』なるものが發表せられた。公開狀は社會民主黨の八月四日に於ける態度を非難し、速かに政府との妥協を棄てゝ再び階級爭鬪を開始すべしとの意味を布衍したものであつた。すると其の後十日すなはち十九日に於いて『ライプチーゲル・フオルクスツアイツング』紙にはハーゼ、ベルンシユタイン及びカウツキーの署名になる宣言書が發表せられた。宣言書の意味は戰爭は

最早防禦戰にあらず、實に帝國主義的侵略戰なり。故を以つて社會民主黨は其の根本主義よりして當然政府援助を撤回すべきであると云ふにある。此れを見た政府は直ちに『ライプチーゲル・フォルクスツアイツング』に休刊を命じ、且つ件んの宣言を發表したる理由を以つて首腦者を所罰した。併しながら反對の勢力は當に同一となる傾向を持つて居る。政府が少數黨を壓すれば壓するだけ、少數黨は力を振ひ起して政府に對抗した。六月二十六日の『フォルウエルツ』紙は『社會民主主義と平和』なる宣言を發表して、國民は併合を欲せず、國民は平和を欲すると論じ、政府から五日間の休刊を命せられた。この宣言を發表したる『フォルウエルツ』紙以外の新聞も亦同じ運命に遭逢した。要するに政府が少數黨を壓迫することによりて、此れを解散せんとする企ては全然徒勢に歸した。

一九一五年八月二十日政府は又もや戰費支出の協賛を求めた。そこで其の六日前すなはち八月十四日百十名の社會黨議員並びに委員連中は豫め會議を開いて協議を凝らした。此の協議會に於いてはドクトル・エドウワルド・ダウイツドは多數黨を代表して、又ベルンシュタインは少數黨を代表して各々意見を陳述し、兩黨論爭の後次ぎの決議を八月二十四日の『フォルウエルツ』紙上に發表した。

（一）獨逸領土の尺地も割讓することを許さず。從つてアルサス、ローレンは如何なる形式に於いても佛國に返附せざるものとす。

（二）獨逸の商業上の發展に對しては、安全の保證を得ざるべからず。

（三）埃匈または土耳古の瓦解を防がざるべからず。

（四）獨逸は他國の領土を併合すべからず。

（五）國際仲裁々判所を常設すべし。

此の決議は多數黨と少數黨との妥協案であるから、主義が必ずしも一貫して居ない。簡單に此れを評すれば、獨逸は負けてもならぬが、又勝つてもならぬと云つたやうな決議である。

そこで八月二十日となつたが、政府の要求する戰費は百億馬克（五十億圓）であつた。六日前の協議會に於ける社會黨は協賛反對は三十六名すなはち全體の三分の一であつた。併しながら議會での投票は、少數黨は多數黨と共に協賛の投票をなし、唯例のリーブクネヒトのみ敢然として反對の投票をなした。前回彼れと行動を共にしたリユーレは偶ま議場に居らず、終に投票を後れて終つた。

一九一五年八月から十二月までは社會民主黨の形勢に大なる變化はなかつた。

九月五日より同八日まで瑞西のチンメルワルドで國際社會黨大會が開かれ、獨逸よりは少數黨の中十名が此れに出席した。その中レーデブール及びアドルフ・ホフマンは國家間の戰爭を終熄せしめんがために、速やかに國際的階級戰爭を起すべしとの大會の決議に署名した。此の時に當つて注目すべき一つの現象は、獨逸の勞働組合が社會民主黨の少數黨に反對して、多數黨に味方したことである。此れには繰つりの糸があること勿論である。勞働組合を使嗾して、社會黨少數派を窘迫せんとの策である。すると十一月になるとシャイデマン及び他に三名の多數黨議員が白耳義の戰線を訪問して、司令部の厚遇を受けた。獨逸政府が多數黨議員を招待したのは、少數黨に對する面當てと、然して獨逸の士氣が如何に振へるかのプロパガンダとして、多數派社會黨を踏み臺としたものである。少數黨議員は無論怒つた。其の餘波がツイマールに及び、ツイマールの社會民主黨はチンメルワルド大會の決議に贊し、白耳義戰線に到れる四名の議員を譴責するの決議を通過した。此の邊のことは要するに小供の喧嘩で、餘り大局に影響するところがない。

斯くの如く無意氣なる小競り合ひを續けて、十二月の帝國議會となつた。一た

いに國民の間で、戰爭の目的及び講和條件などが矢釜しく議論されて居たが、此れは國民が政府に欺されて居たと云ふことを語るものであるから、政府に取つては少なからぬ打擊である。十二月九日首相は此れに就いて政府を代表して說明を試みたが、言辭甚だ明瞭を欠ぎ、殆んど何人をも滿足せしめなかつた。首相の云ふところは單に抽象論、單に一般論で、國民の琴線に觸れて成るほど〳〵感服せしむるものがなかつた。社會黨多數派のシャイデマン、ランズベルグは平和に對する希望と非併合とを力說し、此の二點に就いては各政黨概ね反對はなかつた。唯政府側と政府を取り圍むところの保守派は、無論贊成せなかつた。扨ていよ〳〵二十一日となり、政府は期待せられたる如く、又もや軍費支出の爲めの公債の協贊を議會に提出した。此れより先き(十四日)社會黨は例によりて自黨の會議を開き、軍費案に對する態度を決定したが、此の時は贊成五十八名反對三十八名。不參の者は書面を以つて贊否を言明し、此れを通算すると、贊成六十六名、反對四十四名。すなはち贊否の比例は三對二となつた。政府が戰費を要求する毎に、反對派が增加して贊成派が凋落することは注目すべき現象である。そこで二十一日の本會議となり、政府の說明があり、エーベルトは正式に社會黨を代表して、獨逸國民に總て自

術のために戰を續けざるべからずとの宣言を朗讀し、此に對して少數黨二十名を代表するガイヤーは別に一篇の宣言を讀み上げ、首相が併合論者の味方なるかに見ゆるを非難し、斯くの如くんば戰費は否決するの寧ろ當然なりと述べた。すなはち社會黨の多數派と少數派とは茲に始めて、戰費について全然反對の態度に出でたのである。此れまでは黨内では爭つても、議會に對しては一黨として終始したものが、其の爭ひを議會にまで移し、全然異なれる二つの團體として活動するに至つたのである。此れは最も注意すべき現象である。然るにいざ投票となるや、社會黨は完全に三つに分裂して終つたから奇觀である。其の一つは二十名の最硬派議員で、彼れらは明確に反對の投票を爲した。今一つの三十名の連中は四月及び八月に少數黨が爲したる如く、議場を退却して終つた。殘れる一派は社會黨多數派で此れは無論贊成の投票を爲した。そこで此の反對投票の二十名の議員に對して、黨則に背いたと云ふ議論が出たが、多數黨にそれほどの蠻勇もなく其のまゝ泣寢入りとなつて終つた。若し多數黨が蠻勇を振つて少數黨を懲罰したら、反つて少數が多數を懲罰すると云ふ奇現象を呈するのであつた。何となれば少數派の代表する選擧民は百三十八萬五百九十人で、多

數の代表するものは百三十七萬二千五十八人『フォルウェルツ』紙一九一六年一月六日に據る）で實際少數黨の方が約一萬人の多數を代表して居たからである。何故斯んな事が起るかと云ふと、伯林が少數黨の重もなる根據地であり、然して伯林では人口の割合に選出議員の數が、非常に少ないからである。

斯んなことで社會黨の少數派と多數派との分裂は、單の時期の問題となつたが、翌一九一六年一月の社會民主黨の委員會や獨逸勞働組合總委員會が『コレスポンデンツブラット』紙上に於いて、社會民主黨幹部に對して黨全體の規律を振肅せよとの旨を發表したりし爲め、ますゝ少數黨の反對を煽つたが、此の月リープクネヒトは正式に社會民主黨から分離して無所屬議員となり、オットー・リューレまた此れに從がつた。風雲のまさに動かんとするを見るべきである。すると二月に至り少數黨は多數黨から分離獨立して、デュイスベルグに其の本部を置かんとする風聞が起り、此れに對しては多數派社會黨も政府も共に驚ろき、全力を擧げて此れが妨害運動に着手した。併しながら兩派の分離は自然の勢ひであつて、到底此れを阻止することは困難である。社會黨多數派が開戰當時より採り來れるが如き政策を取る以上、此れに對する反對派は早晩生れて來なければならぬ。それ

が社會黨内から發生すると云ふまでゝあつて、不思議でも何んでもない。從がつて此れを抑へつけて終ふと云ふのは、畢竟徒勞なる企てゝある。

斯る不穩の空氣を以つて包まれて居る政府は、三月に至りて更に戰時公債募集竝びに緊急豫算の協贊を求めた。例によつて議會開會前打合せ會があり、社會黨の少數派は黨是として豫算に贊成するを得ずと言明したが、無論多數黨の爲めに壓倒されて終つた。そこで黨を代表して議會に演說すべき者を選む段取りとなり、此れまた二人とも多數黨から出た。少數黨は烈火の如くに怒つた。然うして密かに謀計をめぐらし、三月二十四日の議會に於いて多數黨のシャイデマンの後に自分等の黨派たるハーゼを出して、少數黨の主義主張を議會に開陳せしめた。蓋し代表者を出し得なかつた腹癒せである。次いで投票に移り、ベルンシュタイン並びに十七名は反對の投票をなし、十四名は棄權した。結果から見れば無論多數黨が勝つた形ちではあるが、多數黨は此の際を以つて更に少數派に一擊を加へんと欲し、議會に對してベルンシュタイン等十八名のものは最早我が黨の豫算委員たることを認めずと通告した。兩派の喧嘩はいよ〳〵火蓋を切られた譯である。少數黨から云へば、何ら發言權のない社會民主黨に留まることは畢竟無意味

である。そこで前記十八名のものは從來の社會民主黨より獨立して社會民主勞働を組織し、ハーゼ及びレーデブールの二人を會長とし、ウイルヘルム・デットマンを幹事とした。新政黨に加はつた少數黨議員の外に、二十五名の少數黨は依然として從來の社會民主黨にふみ止まつて居たが、此れは追々と新政黨の爲めに蠶食された。四月六日。此の日は新政黨の初陣である。新政黨は豫算の第二讀會に於いて長廣舌を振ひ辛辣に政府を攻擊した。次いでベルンシュタインは獨逸の橫暴なる潛水艇政策を非難した。此れに對してシャイデマンは舊社會民主黨を代表して政府政策の辯護を試みた。併しながら此れは新政黨ほどに英氣潑溂たるものではなかつた。

第二十五章　カイゼル退位まで

さて社會黨が分裂して二つに分れると、多數黨と政府との壓迫は少數黨に集中せられた。多數黨が少數黨を壓迫するには、社會主義的の言行では到底太刀打ちが出來ぬ。何んとなれば實際問題としては兎も角、純理に於いては少數黨の方が遙かに理義一貫して居るからである。そこで多數黨の色彩は社會主義とは反對の方向に傾き、或る場合に於いては純然たる政府の御用黨となり終つた。多數黨が濃厚なる國家主義的色彩を帶びたる新機關新聞『ソチアルデモクラチツシエ・フエルドポスト』を發行（一九一六年五月發刊）して、此れを戰線の將卒に分つた如きが其の一例である。此れと同時に政府の社會民主勞働黨に對する壓迫甚だしくなり、ヘルツフエルドは正規の旅券を持つて居たに拘はらず、瑞西への國境を越えることを禁ぜられたり、ヘーギは一記者の逮捕を攻擊したるが爲めに東部戰線に送られたり、伯林に於いて二十二箇の社會黨の集會が、警察から禁止せられたりした。併しながら社會民主黨や政府が高壓手段を採るほど、反つて國民の同情は社會民主勞働黨に集まるの現象を呈した。況んや戰爭は既に二年に及び、獨軍の華々しき戰勝も見ることを得ず、國內は漸やく食糧不足、物價騰貴に苦しめらるゝに至つたから、社會民主勞働黨はます〳〵勢を得るに至つたのである。そこで此の形勢を緩和すべく社會民主黨は、六月七日の政府提出の豫算を否決して終つた。九千數の武器を奪つて我が武器とする遣り方である。恐らく此の間には政府との了解があつたこと丶思はれる。何となれば其の後政府が百二十億馬克六十億圓の戰時臨時支出を求めた時には、社會民主黨は此れに協贊を與へたからである。此の議會に於いて社會民主勞働黨が反對したのは勿論のこと。尙ほ少數黨の連中で社會民主黨に籍を置いて居る者二十二名は、投票の前に退場して棄權して終つた。併しながら初めに豫算を否決したことは、如何に社會民主黨の芝居にせよ、思慮なき一般國民は社會民主黨と雖も、必らずしも政府の走狗ではない、政府反對は社會民主勞働黨の專賣ではないと考へるやうになつた。此の潮合に乘じて社會民主黨は廢兵就職法案（六月三日）勞働組合法修正案（六月五日）戰時利得稅法案（同上）等を通過せしめ、社會民主勞働黨の政策を奪つて終つた。此れは社會民主勞働黨に取つては、確かに痛手であつた。何となれば社會民主黨が、斯くの如くドシ〳〵と自黨の綱要を實行するに至らば、此れ社會民主勞働黨の必要なきを語るものである。

あるからである。然らば社會民主勞働黨は如何の方策によりて、此の社會民主黨の突擊に對抗したかと云ふに、唯無暗に反對するのみであつた。好漢惜むらくは兵法を知らずと評せらるべきところ。事の善惡に關せず、敵の提出し、敵の後援する議案たるの故を以つて反對するは、反對の爲めに反對するもので、終には黨の誠意を國民から疑がはれる處れがある。

然るに社會民主黨の策戰も、必らずしも巧妙なるものばかりではなかつた。それは社會黨の機關紙『フォルウエルツ』を乘り取らんとする計畫である。『フォルウエルツ』の幹部は社會民主黨の代表者も支配人フイッシャーなどが居たが、少數派及び社會民主勞働黨系の代表者の方が多かつた。そこで社會民主黨は此れを乘つ取る策として暴力を用ふるに決し、フイッシャーをして支配人の權利を濫用して、少數派の記者マイヤーを解傭せしめた。無論マイヤーは烈火の如くに怒つた。然うして幹部が斯る橫暴を働くならば、地方黨員をして黨費の支拂を停止せしめて、機關紙の出なくなるやうに壓迫を加へなければならぬと敎圖いた。編輯委員會もマイヤーに加擔しフイッシャーの橫暴を責めた。併しながらマイヤーの提議にかゝる黨費の支拂停止は、妙は妙に相違なけれど、斯くすると社會黨の總會に

代表者を送るの權利を喪なつて終ふから、此れは實行不可能であると云ふに一致した。唯伯林の一選擧區テルトウ・ベースコウに於いては黨費の支拂を停止し、他にも此の例を追ふものがあつた。社會民主黨はマイヤーを解職せるに滿足せず、自黨のヘルマン・ミユラーと云ふ男を檢閱係りに任命し、多數派の行動に是非の意見を挾むやうな記事をばドシ〳〵抹殺せしめた。無論多勢に無勢だから如何とも致し方なく、社會民主黨が勝つた形式にはなつたが、此れは頗る反對派を激昂せしむる原因となつたから、決して賢明なる反對黨對抗策とは云ふことが出來ぬ。

社會民主黨が少數黨及び社會民主勞働黨を壓する機會は、尙ほ社會黨大會と云ふものがある。前述の如く聊か國民の同情を煽り、此れに乘じて事を爲さば、多數黨の勝利を得るは容易な事なりと爲した。そこで幹部は總會を召集するに一決し、案を具して此を各支部の代表者より成る委員會に諮つた。委員會は同七月二十三日を以つて相會し、然して總會は其の時機にあらず、宜しく各支部から代表者を選出せしめ、此れらより成る協議會を開いては如何と提議した。代表者の協議會たると總會たるとは社會民主黨の眼中にはない。彼れらは唯反對派を抑へつけ得れば夫れで目的は足りるのである。そこで早速委員會の提議を容れて協議

會を召集することにした。然るに社會民主黨の目的が反對派を屈服するに在ることは、反對派は百も二百も承知して居る。そこで此の協議會にも頻りに反對した。併しながら多數黨は、反對派の反對ぐらゐに脅やかされるものではない。萬難を排して協議會を開くと云ふ態度で、着々此れが實行に取り掛つた。斯うなると少數派及び社會民主勞働黨は、全然此の協議會に加はらぬか、或は加はつて大いに協議會で氣焰を吐くか、何つちかの途を取らなければならぬ。彼れらは考慮の末後者を取つた。蓋し政府の彼れらの言論の取締りは嚴重を極めて居る。殆んど言はんと欲することを言ふを許されぬ。協議會では警察の干渉はないから、思ふ存分に氣塊を吐ける。氣塊を吐き盡くして、それでも形勢非と見るや、其の時に於いて協議會をボーイコットするも遲くはないと考へたからである。

そこで一九一六年九月獨逸全國を通じて、協議會に列席すべき代表者の選擧が行なはれた。各支部に於ける少數黨と多數黨の選擧競爭は猛烈を極めたが、多數社會黨は一般に人氣よく、特に政府に反對したり、又國民の喜ぶやうな人氣問題を有利に解決せるが爲め、少數黨は動もすれば受け太刀となつた。選擧の結果は矢張り豫想の通りで、伯林、ブレーメン、ブレーメルハーフェン、ゲーニヒスベルヒ、エッセン、デユッセルドルフ、ライプチッヒ、サクソニー地方、下部ライン地方及び北部巴威に於いては少數黨が勝ち、特にフランクフルトの如きは二人の多數黨員に對して七人の少數黨員を選出すると云ふ有樣であつた。併しながらハムブルグ、リューベック、ハノーヴアー、ウエストファリア、シユレスウイッヒ、ライン州、ヘッセ、ナッサウ、バーデン、ヴユルテムベルヒ及び巴威の大部分は多數黨の掌中に歸し、概して多數黨が優勢であつた。代表者總數三百二名、此れに百四十三名の議員及び幹部を合せて合計四百四十五名となる。協議會の第一日九月二十一日には此の協議會を以つて社會黨全部の政策を決定すべきや否やの論爭があつた。此れは無論多數黨から提出せられた議案である。多數黨から提出せられた丈け、少數黨に取つては不都合なものである。そこで少數黨は協議會は畢竟協議會であつて、單に意見の交換を主とする。その決議によりて社會黨全體を束縛することは不條理であると論じ、此れが裁決は延期せられた。翌二十二日社會民主勞働黨を代表してハーゼ、然して過激派を代表してケート・ドンケル長廣舌を弄したが、次いで多數黨の主張を是認する意味の決議案がドクトル・ダウイッドによりて提出せられた。ダウイッドは社會民主黨でも最も帝國主義的色彩の濃厚なる一人である。そこ

で此の議案について火を吐くやうな激論が、多數派と少數派との間に起り、日暮るゝも決せず。已むを得ず第三日には討論終結の動議あり、ダウイッド案を投票に附すべきや否やに就いて議論あり少數黨は終に反對の効なきを見て決然として退場した。退場したうちにはハーゼ一派からアントリック・ホッホに至るまでを含み、殘れるは單に多數黨一味のみ。そこで彼等は一瀉千里の勢ひを以つて自分に好都合なる議案を裁決し、終には社會民主黨の戰費協贊を承認し、併せて小數黨の行動を不可とする決議をすら通過して終つた。可なりの橫暴振りと云ふべきである。

茲に注意すべきは多數黨なるシャイデマン一派の勢力である。純理から云へば彼れらは一九一四年八月四日の軍費を可決せる時に於いて、社會黨の精神を喪なつて終つたものである。然して眞の社會黨の衣鉢は少數黨によりて繼承せられて居る。だから多數派社會民主黨は、嚴格に云へば其の存在の意義を失なつて居るものである。保守派と同一のことを遣るならば、それは一切保守派に任せて置けば宜いことである。だから國民は多數黨を去つて少數黨に趨らなければならぬと思はれるが、實際のところは多數黨の方が勢力があつて、少數黨の方は勢力

はない。此れは一面に於いて純理が如何に政治に對しては勢力がないかを語る。たとへば往年日本に於ける國民黨の如きである。然して今一面に於いては獨逸國民が如何に純理よりも實際を貴ぶかを語る。既に戰爭が始まつた以上、理窟を抜きとすれば、今さら非戰論を唱へたつて始まるものではない。少なくとも國民の多數は斯く考へる。戰爭するかせぬかを決する時には、非戰論も意義を持つが、一旦戰爭が始まつたら勝たなくては意味を爲さぬ。此の點がシャイデマン一派の獨逸で優勢であり、現に尙ほ優勢である所以である。彼れらは一方激烈なる帝國主義に反對して非併合を主張した。然して他方少數黨にも反對して、敵が現狀維持の平和に同意する迄は、獨逸は戰はなければならぬと云つた。實際問題とすると斯る主張は行はれるものではない。何うしても帝國主義的傾向を持つものであるが、併しながら理論として見るときは、シャイデマン一派の此の主張は温和なるだけ國民の多數を牽きつける力がある。少數黨の主張のやうに戰爭を已めたらば、敵國は恣まゝに獨逸に侵入し來つて、多數黨とか少數黨とか云つた喧嘩も問題外となつて終ふ。だから十一月に提出せられたる十七歳乃至六十歳の獨逸臣民を、政府の必要とする業務に就かしめんとする强制服務法案なども、少數黨は

個人の自由を侵害するものだと云つて反對したが、此れは戰爭して居る以上反對する方が無理である。二三修正の後此れを可決した多數黨の方が實際問題の解決としては要領を得て居ると云ふべきである。

併しながら多數黨が少數黨を壓迫する横暴さと、政府と妥協して其の番犬を勤めたことは多數黨の弱點である。此の事が無かつたならば少數黨の分裂もなく、またスパルタカス團の如きもの丶出現もなかつたかと思はれる。例の社會黨の機關紙『フォルウエルツ』も終に政府と共力して、多數黨の手に收めて終つた。此れは十一月のことである。そこで少數黨は『ライプチーゲル・フォルクスツアイツング』を其の機關紙と爲し十月十九日二千部を印刷して、此れを『フォルウエルツ』の讀者に配附したが、次いで政府から發賣を禁せられた。此れは多數黨横暴の一例であるが、其の横暴には常に政府の陰影が宿るものだから、國民をして不必要な疑惑を起さしめた。此れは多數黨に取つて非常に不利な事柄である。だから斯くの如き政府の走狗たる多數黨には會費を納附するの義務はないと云つて、方々の支部で會費納附の拒絶を決議するもの多く、ブレーメン(二十對二百十票)、ブランシュウイックなど相次いで會費拒絶の決議を通過した。然れば十二月初旬シャイデマンとエーベルトとが海牙の國際社會黨本部の委員會に出席したが、此れは政府の特派使とも云ふべきものであると一般に解釋せられた。萬事が斯くの如くであるから多數黨も仕事が出來ぬ。仕事をすると必らず波瀾を重ねて居るうちに、終に拾收すべからざる破裂を來す。

此の時に方つて政府は一の緩和策を講じた。それは講和提議である。獨逸政府は此の講和提議が物になるとは考へて居なかつた。併しながら講和の提議を爲せば、戰爭の責任を協商國に嫁する形式を得られ、また協商側決心の程度を探知し、アハよくば協商國間を離間し得るかと考へた。此れは事實である。併しながら獨逸政府の主要なる目的は其の對內政策である。そこで一九一六年十二月政府が講和の提議を爲すや、多數黨も少數黨も擧げて此れに狂喜した。併しながら此の狂喜は終に狂喜損となつて終つた。唯政府の得たるところは更に戰爭を繼續するの口實である。然して此れによりて少數黨を壓迫するの機會である。そこで社會黨內の多數派と少數黨の爭ひはます〳〵激しくなつて來た。

然るところ一九一七年三月ピーター大帝の築いた北方の大帝國は、革命の血の中に漂よつた。露國の革命は、獨逸の社會黨が十數年かゝつて爲し得ざりし事

を、一朝にして爲し遂げた。すなはち三月十四日首相は内政の民主的改革を斷行すべしと約し、又革命の起るやウイルヘルム二世は復活祭を期として、普魯西に直接普通選擧制を布くべしとの詔書を下した。露國の革命は獨逸民主主義の爲めに恩人である。そこで三月十九日シャイデマンは政府に向つて此れらの約束を即刻實行されんことを迫り、此の目的の爲めに國民自由黨までを含める一種の大同團結を形ち造らんことを提議した。此れは確かに賢明なる政策である。然るに一方の少數黨は政府の約束を以つて一切民を欺くの奸策とし、多數黨に對抗するの策として、四月六日より同八日に至るゴータの大會に於て社會民主勢働黨とスパルタカス團とを打つて一丸とせる、獨逸獨立社會民主黨を組織せんことを企てた。此れは少々早計であることは勿論である。政府をして其の約束を履行せしめんとする努力に對して、まだ何れとも結果の分らぬうちに、此れに反對するのは決して策の得たるものではなく、何ら具體的の反證なくして、政府に誠意なしと認むるが如きは態度餘りに輕薄である。純理的合理的なる少數黨が、漸次に過激化しつゝあるのである。然るに少數黨が斯く過激化しつゝある一方、多數黨は漸や〳〵官僚的色彩を帶びて來た。多數黨は國民を操縱する上に於いて、缺ぐべからざ

る政府の道具となつた。保守派の面々は此の方面に於いて全然無力である。そこで多數黨は政府部内に於いて追々有力なる地歩を固めた。五月政府が憲法改正委員會を新設し、シャイデマンを委員長とし、尚ほ多數黨からダウイッド、グラッドナウエル、ハイネ、ホフマン及びランズベルグ、然して獨立社會民主黨からはお附き合ひ的にハーゼ及びレーデブールを委員に任じたが如きは其の一例である。尤も委員會の任命は、政府が一時の緩和を求める爲めであつたのは事實である。

此の頃社會黨多數黨はなか〳〵多忙であつた。政府に對しては其の内政改革の遲延と、講和問題に對する態度の不徹底とを攻撃せなければならなかつた。蓋し然らざれば信を國民に失なひ、黨の立場を危ふくする虞れがある。彼れらは又外國に對して、自分等の守り立てゝ居る獨逸政府を辯護せなければならなかつた。最後に彼れらは少數黨に對して其の過激化を責め、其の黨勢の擴張を妨げなければならなかつた。此の内の第一の活動は彼れらと政府との關係を疎隔せしむべくして、却つて兩者を親密なる關係に持ち來したから妙である。それは社會民主黨は政府に向つて、民主的改革と講和とを迫る。すると政府は此れを緩和する爲めに、黨員に色々な官職を與へる。斯くして社會黨の政府壓迫は却つて社會民主

黨と政府との結合を密接ならしめ、然して社會民主黨は徐々として政府に喰ひ入つたのである。社會黨は斯くの如くして政府に近づき、政府に近づくと同時にます〳〵政府を壓迫した。實際問題としては獨立社會民主黨のやうに遠距離の射撃でないだけ、頗る有効である。敵の只中に亂入して敵を撃つやうなものである。そこで彼れらは七月に至り政府が更に戰費の協賛を求むるや、ずなはち政府に向つて反噬を試みた。戰費案の提出せらるゝ前にも政界の空氣は頗る險惡にして、社會民主黨は彼れらの要求にして容れられざる限り、軍費の協賛に反對すべしとの風說が流布された。此れは社會民主黨の威嚇政策である。社會民主黨の爲めに、既に朝に一城を失なひ、夕に一壘を奪はれると云ふやうな地位に居た政府は、此れを聞いて敵が眼前咫尺に迫つたかに驚愕した。然うして善後策として社會民主黨員を入閣せしめて、一時を繕縫しようかと云ふ說も起つた。社會黨としては非常な成功と云はなければならぬ。官僚の牙城に社會黨を入れようと云ふのは、如何に背に腹は代へられぬとは云へ、此れ官僚政治の斷末魔である。軍閥政治の凋落である。彼れらから云へば自分の役目を勤めさすべく社會黨を懷柔し、漸次に喰ひ込まれて、終には身代に龜裂が入つたものである。飼ひ犬に手

を噛まれたと云ふのが、彼れらの心理狀態であつた。併しながら社會黨を入閣せしむるには、第一に政府の組織を民主化せなければならぬ。第二に現狀維持の平和に贊成せなければならぬ。然らざれば社會黨は入閣は出來ぬと頑張つた。一寸居直り强盜の格である。政府組織の民主化は政府の方でも、何うにか一時を誤魔化し得、また社會黨も自分らが入閣する以上タイした問題とはして居らぬが、第二の現狀維持を基礎とする平和については政府は言辭極めて曖昧、終に社會民主黨を滿足せしむることを得なかつた。社會民主黨が滿足せなければ、軍費は否決される。そこで窮境に落ちたベートマン・ホルウエッヒは終に冠を懸けて去つた。此れが爲めに社會民主黨の入閣問題も立消えとなつたが、併しながら獨逸の宰相が議員の反對の爲めに辭職したのは、特記すべき現象である。獨逸の宰相は皇帝にのみ對して責任を持ち、議會に對して責任を持たぬと云ふ原則が、事實に於て全然破壞されたものである。すなはち時代の推移は最早無責任なる官僚を許さぬまでに、民主主義の方へ進展して來たのである。此の原則が認められる以上、社會黨の入閣は餘り問題でもないし、また入閣とは單に一步を距てた隣り同志の事件である。だからベートマン・ホルウエッヒに次いでミハエリス起ちて新政府を組

織し、食糧次官として社會民主黨の一人アウグスト・ミュールが出た。此れは七月末のことである。獨立社會民主黨が此れを以つて、社會民主黨の攻撃材料として利用したのは勿論のことである。

然るにミハエリス内閣の無能振りは、幾ばくもなくして國民の發見するところとなつた。新内閣の施政は事々物々不得要領であつた。流石に新内閣に好意を有する社會民主黨も愛想をつかして、斯かる内閣と情死するのは考へものだと云ふやうな態度となつた。そんな事とは知らずにミハエリス内閣は反動政策を行なかつたから、到底圓滿な關係が持續されさうな筈がない。すなはち内閣後援のもとに『祖國黨』と稱する征服と賠償とを主張する汎獨主義の新政黨が組織(九月九日)せられた。豫ねてから新内閣に愛想をつかして居た社會民主黨は、すなはちミハエリスに對する援助を放棄し、自然に獨立社會民主黨と近づくやうな狀態となつた。

然るところ十月六日、少數黨のランズベルグは其の黨の名によつて、軍隊に於ける汎獨主義喧傳に關する彈劾案を提出した。ところが何分反動政府のことであるから、委員會に於いて陸相シュタインが木で鼻を括つたやうな挨拶をする、副總理のヘルフェーリッヒは傲岸な態度で社會黨を極めつけると云ふ次第で、益に社會民主黨と政府との緣はいよ〳〵切れて終つた。そこで十月八日午後豫算の再審査委員會は開かれ、社會黨多數派は獨立社會民主黨と共に反對の投票をなした。社會黨の兩派が斯くの如く協同して政府に反對せるは、實に空前の出來事である。十月九日前記社會黨の彈劾案が上程せられ、政府不信任案の裁決となるや、社會黨の多數派と少數派とは又もや一致して不信任の投票をなした。十月十日及び十一日秋季議會最後の兩日、社會黨の二派は依然として結束を固くし、造船業者補助修正案に反對し、臨時豫算の第三讀會に於いて此れを否決し、陸海軍人に對する政府の「啓蒙運動」を全廢するの決議に贊成した。此れ實に社會黨の各派が合同して徹頭徹尾政府に反對し、他の諸黨も大同團結を造て政府を助け、然して社會黨が勝てるものである。獨逸政府は元來社會黨多數派が此れを援助する間こそ維持出來るので、彼れらが援助を拒んだら、すなはち其の瞬間に立つて行かなくなる。況れは何人にも明瞭なるところである。然るにミハエリスの凡庸なる、軍閥及び官僚に使嗾せられて浮かと此れに乘り、社會民主黨を敵としたのである。ピスマークの時代なら議會が反對すれば解散するだけの事であつたが、時代の異なれる現

代に於いては然うは行かぬ。此の暗易き道理に眼を閉ぢ、反動政策を試みたのは餘ほどの愚である。斯くして十月二十八日其の短命なる內閣は瓦解した。蓋し自繩自縛である。後任は羅馬舊教徒なる前大學教授ヘルトリング伯。

十一月三十日、ヘルトリング伯は帝國議會に臨みて百五十億馬克(七十五億圓)の戰費に協贊を求め、國民理想の實行、領土の保全及び敵國の擊退を以つて戰爭の目的なりと演說した。然るに此の時は既に露獨休戰條約の成れる後である。だから形勢は非常に政府に有利。十二月一日滿場一致を以つて此の休戰條約に關する政府の處置を是認し、續いて戰費をも可決して終つた。唯獨立社會民主黨だけは反對の投票を爲した。併しながら此の戰費の可決を以つて、國民が政府の戰爭政策に裏書せるものと解するは誤まつて居る。獨逸の對露講和によりて民心が緩和されたるのみで戰費の協贊は云はゞ平和希望の發現である。すなはち政府の戰爭政策には反對なのである。それを政府が宜い氣になつて、斯の民欺むくべしと考へたのが大間違の元である。だから國民は對露休戰條約を見て、一般的平和來るべしと考へたが、一九一八年一月末頃の英米の態度に鑑み、平和の然かく急に來らざるべきを知つて失望の色を浮べた。

二月二十五日ヘルトリング伯は再び議會に演說して、時局に對する獨逸政府の立場を辯護して『世界は戰禍に倦み、殊に中立國は一般的講和を切望しつゝあるも英米伊は依然として正義の聲に耳を傾けんとするの模樣なし』と言つたが、斯んなことでは國民は滿足せなかつた。食糧の缺乏より各地には擾亂が起る。同盟罷行は流行する。政府財政の基礎も動搖して來る。此れに對して露國と講和したり、羅馬尼と講和したりしても、到底國民の滿足を買ふことが出來ぬ。此は餘ほど奮發せなければ、政府そのものが危ない。そこで軍閥と官僚とが寄つて考へついたのが、一九一八年春の大攻勢である。古い手であるが西部戰線に殊功を樹てゝ以つて國民を緩和せんと試みた。官僚と軍閥とに取つては實に乘るか反るかの大芝居である。此の大芝居の幕は三月二十一日を以つて切つて落とされ、世界は均しく固唾を飮み手に汗を握つて見物したが、最初のほどこそあれ、時日の經過と共に獨逸の攻勢は漸次に弱り、作戰の失敗も著るしく、六月中旬まで四回の大攻勢に獨軍の死傷實に六十六萬以上に達すと概算せられた。此れでは結局藪蛇である。國民は益〻不平滿々である。だから六月初旬維納に於いて開催せられたる獨墺社會黨大會は、左の條件の下に一般的講和提議を行なはんことを獨墺政府に要

求するの決議をなした。

（一）一般的武裝解除、國際聯盟の組織及び國際仲裁々判所の設立。

（二）併合及び賠償要求の放棄。

（三）露國より分離したる國境住民に對する自決權の附與。

戰爭に勝てば兎も角、負けると斯う云ふ議論の出るのは無理はない。此の時まで八回に渡れる獨逸の軍事公債募集額は殆んど九百億馬克に達し、此れが利子支拂の爲めばかりでも、年五分利として約四十五億馬克に近く、更に短期公債の元利支拂をも加算する時は、獨逸政府の財政的困難は可なり切迫し來つたのであるから、國民の浮き足になつたのも尤もの次第だと云へる。

然かも八月中旬に至るや協軍側の攻勢著しく進展し、獨逸は寸進尺退と云ふ醜狀を重ね、此の爲めに軍閥に對する信用は地に墮し、官僚政治はいよ〳〵無能の銘が打たれた。斯うなつては政府は仆れるより外に致し方がない。官僚と軍閥との乾坤一擲の大芝居が當らず、今は潔よく萬事を投げ出すより外に途はない。そこで九月二十九日ヘルトリング伯は先きに外相となれるフォン・ヒンツエと共に皇帝に謁見して辭表を捧呈した。次いで十月三日バーデン國のマックス公が宰相兼普魯西首相に任ぜられ、先に副宰相となれるフォン・バイエルはそのまゝ留任することゝなつた。其の他閣員の變改あり、多數派社會黨のシャイデマンも亦無所屬大臣として國政にあづかることゝなつた。此の內閣は要するに清算內閣である。普魯西化せられた獨逸の政府が破算し、其の後始末をする內閣である。そこで十月五日新宰相マックス公は議會に於ける多數黨の政綱を基礎とすべき旨を誓約した。すなはち議會政治に對して官僚政治が明確なる白旗を樹てたものである。然して議會多數黨の輿論に從がつて

（一）獨逸政府は即時休戰の提議を爲すこと

（二）何れかの中立國に講和全權委員を派遣會合せしむべきこと

（三）該委員は仲裁々判及び軍備撤廢國際聯盟等の諸問題を審議すべきことを

提議すること

を言明し且つ獨逸側委員は特に

（一）埃匈國の聯邦組織に關する件

（二）露國々境に於ける諸民族の自決權に關する件

（三）白耳義の回復及び賠償に關する件

(四) アルサス、ローレンの自治に關する件

(五) 獨領植民地の還附に關する件

に就いて商議の權利を與へらるべきことを主張することを言明し、且つ講和談判開始のため瑞西國官憲を介して米國大統領に照會の措置を執れる旨をも附言した。

獨逸の對米通牒は十月七日を以つてウイルソン大統領の手に入り、翌八日國務卿ランシングをして、獨逸の講和提議の誠意を保障するために、先づ中歐二國が侵入地點より總て撤退するの必要あることを回答せしめた。獨逸は此れに對して十月十二日更に覆答を與へ、同十四日ランシング氏は之に滿足せずとて、大統領の意を受けて斷然獨逸の申出を拒絶した。その後獨逸政府は尙此れに關する應酬に盡しつゝあつた間に、十月二十六日議會の多數黨によりて提出せられたる憲法改正案が可決せられた。改正の要點は從來皇帝の獨裁權に屬して居た宣戰講和の決定に、各聯邦議會及び帝國議會をして干與せしむること、竝びに獨逸宰相の責任が從來皇帝に對するものであつたのを、議會に對するものと改正せられたことである。此の第二の改正によりて獨逸は茲に名實共に民主的の國家となつたのである。

十月下旬、久しく入獄中なりしリープクネヒトが釋放せられて、平和論者の爲めに萬丈の氣焰を擧げ、此れと反對に參謀次長ルーデンドルフ將軍辭職し、好戰軍閥凋落の秋の色は濃くなつた。長らく苦戰を續けて居つた土耳古も十月三十一日を以つて終に屈服し、十一月四日墺匈國亦協商國と休戰條約を結び、獨逸單り中原の寒風に孤立するの運命となつた。斯くして十一月十一日獨逸と協商各國との間に休戰條約は締結せられた。

休戰條約に先だつ四日すなはち十一月七日、シャイデマン等の社會黨は左記箇條の要求を宰相マックス公に提出し、若し容れられずんば、社會民主黨は政府より連袂脫退すべき旨通告した。蓋しいよ〳〵風雲を望んで起てるものである。

(一) 目下停止せられ居る集會に關する權利の復活。

(二) 軍人及び警官を抑制して不都合なからしむること。

(三) 帝國議會の多數意見に合致するやう普魯西政府の即時改正。

(四) 十一月九日正午以前に皇帝の退位及び即位權抛棄。

政府は此れを聽く外はなかつた。皇帝も皇太子も此れを聽くの外はなかつた。

斯くしてウイルヘルム二世はアメロングンの人となり、皇太子はエーリングンの人となつた。社會黨は兎も角も目的を達したのである。併しながら獨逸社會黨は此れと同時に大なる責任を背負つたのである。

第二十六章　削られたる獨逸

國と國との衝突は、個人と個人との衝突と異なり、時に緩漫時に急激であるが、一たいに永びく傾向を持つて居る。英國と佛國とは殆んど有史以前から相爭ひ、百年戰爭なるものがあり、それからルイ十四世、ルイ十五世、共和時代、ナポレオンの代を通じて相爭ひ、一九〇四年の英佛協約によりて漸やく一段落を告げた。塞維人が土耳其人に對して起てるも、實にコッソウオの戰ひに復讐を試むるが目的にて、此の戰ひは實に一三八九年の昔しに戰かはれたものである。一八七〇年の普佛戰爭は、普魯西が一八〇六年に負けた復讐戰であり、今回の大戰は佛國から見れば一八七〇年戰爭の復讐である。斯くの如く個人には怨みを忘れること多く、國家は寧ろ年月の經過と共に、ます〳〵此れを痛切にするの觀がある。然して此の間には正義とか人道とか云ふものは餘り考慮に上らぬ。如何に第三者から見て正當と思ふ敗北も、敗北せる當事國は必ずしも然うは思はぬ。此れを國辱とし、臥薪嘗炭盟つて屈辱を雪がんことを期する。第三者の立場を當事國が取ることが出來るならば、最初から戰爭は起らぬ。此の事が不可能なるによりて、世界には戰爭

の絶え間はない。ビスマークは演説(一八八七年一月十一日)して云ふた。

『歴史的に云へば獨佛の境界爭ひは、佛國がメッツ、ツール、ヴエルダンの三敎會領を占領した時に始まる。然らば獨逸が此れらの土地を回復したる今日、此の境界爭ひは消滅したかと云ふに、獨逸側から見れば消滅して居る。併しながら佛國側から見れば、或は全然消滅して居ないかも知らぬ。此れに就いては何人も斷言し得るものはない。併しながら余一個の考へを告白すれば、佛國民の性格が一變するか、或は世界の組織が全然更新せらるゝか、何れかの事が實現するにあらずんば、問題は未だなか〳〵片附いたとは云はれぬ。或は此れからが眞の問題であるかも知れぬ』。

さすがはビスマークなり。彼れは既に三十年の昔しに於て今日あるを豫想して居る。三敎會領を占領したのは佛國であるから、獨佛國境問題適切に云へばアルサス、ローレン問題を開いたのは佛國である。併しながら假りに佛國が占領せなかつたならば、恐らく獨逸が後れて占領したであらう。然る時は國境問題は依然として起つて來る。然して佛國が占領したのを惡いと云ふならば、獨逸が占領するのも善いとは云はれぬから、結局アルサス、ローレン問題には善惡の區別をつ

けることは困難である。現下では如何にも一八七〇年に佛國から兩州を取り上げた獨逸が惡いやうに思はれるが、絶對的に善惡の判斷を下すことは出來ない。今後新獨逸が起り佛國を虐める時には、丁度佛國が獨逸に對して云つたやうに、佛國は一九一九年に獨逸から無法にもアルサス、ローレンを奪ひ取つたと云ふであらう。そこで獨逸の將來は如何と云ふ問題が起つて來る。

戰爭開始の前年すなはち一九一三年には、獨逸の人口は六千七百萬、佛國の人口は三千九百七十萬人であつた。戰爭の結果として獨逸はアルサス、ローレンを喪なひ、波蘭及びシユレスウイッヒ、ホルシユタインを手放さなければならぬから、此れら諸國の人口合計七百萬を失なふ勘定になる。すなはち戰後獨逸の人口は六千萬人である。此れに反して佛國はアルサス、ローレンの二百萬人を併せるから人口から云ふと矢はり獨逸の方が遙かに佛國に勝つて居る。假りに佛蘭西と白耳義とルクセムブルグとが何らかの形式で國防を共同にするやうになると假定しても、これでも合計五千萬人に過ぎぬから、尙ほ獨逸に及ばざること一千萬人である。新獨逸が興隆するとなれば、最近英米佛同盟が豫想する如く、獨逸の鋭鋒は歐洲第一の陸軍國にして兼ねて英國と獨逸との

間に有力なる障壁を築くところの佛國に向はなければならぬ。そこで獨佛の人口力の比較が必要になつて來る。何となれば他に諸種の要素はあれども、一國の力は結局其の擁するところの人間力に基礎を置くからである。

そこで佛獨兩國の人口に增加率を比較する。蓋し兩者とも其の地域は戰前の現在である。

年次	獨逸	佛國
一八一六	二四、八三三、〇〇〇	二九、四八〇、〇〇〇
一八三〇	二九、五二〇、〇〇〇	三二、三七〇、〇〇〇
一八五〇	三五、三九七、〇〇〇	三五、六三〇、〇〇〇
一八七〇	四〇、九九七、〇〇〇	三八、四四〇、〇〇〇
一八七一	四〇、九九七、〇〇〇	三六、一九〇、〇〇〇
一八八一	四五、四二一、〇〇〇	三七、五九〇、〇〇〇
一八九一	四九、七六二、〇〇〇	三八、三五〇、〇〇〇
一九〇一	五六、八七四、〇〇〇	三八、九八〇、〇〇〇
一九一一	六五、三五九、〇〇〇	三九、六〇二、〇〇〇

すなはち一八一六年から一九一一年まで九十五年間に獨逸の人口は四千萬人增加し、此の間に佛國の人口は僅かに一千萬人を增加して居る。尤も此の期間に

アルサス、ローレン二百萬人が佛國から獨逸に奪ひ去られたから、此れを打算に入れる時は、獨逸は三千八百萬の增加、佛國は一千二百萬の增加と云ふことになる。すなはち獨逸は佛國の三倍以上の增加である。普佛戰爭のあつた一八七〇年を境界線として、夫れ迄の人口增加は獨逸は一千六百萬人佛國は九百萬人である。すなはち獨逸の增加率は佛國の夫れに比して二倍弱である。一八七〇年以後になると獨逸の增加が非常に振へるに、佛國は蓼靡不振の狀態に落ちた。獨逸は二千四百五十萬人を增加し、佛國は僅かに三百四十萬人だけを增加して居る。此れを割合に換算するならば、獨逸の增加率は佛國の七倍以上である。若し此の增加の割合が今後も繼續さるゝものとすると獨逸の人口六千萬は三十年後すなはち一九五〇年には約一億に達する。然して佛國の人口は四千二百萬人(アルサス、ローレンを含む)から四千五百萬人となる。一億と四千五百萬人とでは、とても歐洲大陸に平衡を保つことは出來ぬ。如何に英米の尻押しあればとて、此の平衡は最初の機會に於いて破れるの可能性を持つて居る。

一八七〇年以後佛國の人口が沈滯し、此れと反對に獨逸の夫れが長足の進歩を爲せるは、無論いろ〳〵な原因がある。社會制度もあるし、獨逸人が比較的多產的

であると云ふこともあるし、佛人がデカタン趣味を有するといふこともあるし、其の他擧げ來れば可なり多くの原因がある。併しながら此れらの内で最も重大なるは經濟的の理由である。アダム・スミスが其の『富國論』中に下のやうなことを述べて居る。

『勞働者に對する需用は、一國の收入と物資の增加と共に必然的に增加するもの。此れなくして勞働者に對する需用の增さんことは不可能である。從がつて一國富强の最も確實なる證左は、其の人口の增加することである。人間に對する需用も、他の物資に對する需用と同じく、其の供給を左右する。供給が需用に比して遲々たらば、此れを速やめ、又反對に餘り急なれば、此れを遲滯せしむ』。

此れは事實である。機械が發明せられ、一人にして在來の數人分否十數人分の仕事を爲し能ふに至り、需用供給の關係から農村に於ける人口は沈滯した。此れに反して機械は都市に於いて多くの勞働者に仕事を與へるから、都市の人口は非常に增加した。一八七一年以來の獨逸人口の增加も主として都市に行なはれた。一八七一年から一九一〇年までの間に、十萬以上の人口を有する獨逸都市は、總人口百九十六萬八千五百三十七人から一千三百八十二萬三千三百四十八人すなはち六十割增加して居る。尙ほ二萬以上十萬以下の都市では、總人口三百十四萬七千二百七十二人から八百六十七萬七千九百五十五人すなはち十五割增加し、然して五千以上二萬以下の都市では、總人口四百五十八萬八千三百六十四人から九百十七萬二千三百三十三人すなはち十割增加して居る。斯くの如く都會の小さくなるに連れて人口增加の割合が少なくなり、二千以上五千以下の町になると、五百十九萬八百一人から九百二十九萬七千七百七十人すなはち僅かに五割の增加である。然して二千人以下の町及び村落に於いては二千六百十六萬三千八百十八人から二千五百九十五萬四千五百八十七人に減じて居る。機械が農村の人口を稀薄にし、反對に都會の人口を稠密にする傾向あるは、此の統計で明白に證據立てられて居る。

斯くの如く農村の人口が減じ、反對に都市の人口が稠密になるのは、アダム・スミスの云へるが如く勞働者に對する需用が、都市の方が農村に優つて居るからである。然して都會に於いて勞働に對する需用の多いのは主として機械の力である。其の機械とは要するに產業である。產業が盛んであるから、多くの勞働者を必要とするのである。前項に於ける比較は獨逸國内に於けるものであるが、獨逸全體

を一個のものとして、此れを佛國に比較すると、アダム・スミスの定理によりて人口の增殖する獨逸は夫れだけの需用があり、餘り增殖せぬ佛國は夫れだけ需用がないと云ふ結論になる。つまり産業が獨逸に振ひ佛國に振はぬからである。然して産業の振ふと振はぬとは、種々なる原因があるが、其の主要なるものは適當な動力を得るか否かに係る。動力とはすなはち石炭である。石炭が無くては産業の發展は非常に困難である。産業が振はなければ人口も振はぬ。次ぎの表を見ると獨逸と佛國との間に、石炭について如何に運不運があるかゞ分る。

國名	炭層	一九一三年採掘量
獨逸	四二三、三五六、〇〇〇、〇〇〇噸	二七三、六五〇、〇〇〇噸
佛國	一七、五八三、〇〇〇、〇〇〇	四〇、一九〇、〇〇〇

斯くの如く佛國は獨逸に比して石炭が少ない。佛國の含炭量は獨逸に比して二十五分の一であり、採掘量も七分の一である。特に佛國の炭層は薄く且つ頗る不規則で、採掘に費用が掛り從つて炭價を釣り上げる。此れでは産業が獨逸に對して見劣りがするのは當り前の話しである。産業が發展せないから勢ひ人口も增殖せぬと云ふ結果になる。此れが一八七〇年後の佛國である。

一八七〇年以來獨逸が榮えて、佛國が衰ろへたのは他にも原因がある。獨逸聯邦が出來上つたこと、佛國から償金が流れ込んだことなども、獨逸の産業を刺戟する原因であつたが、此れに反して佛國は重稅の負擔を課せられたこと、疲弊の裡にも獨逸に對抗するに足る陸軍を維持せざるべかりしことなどによりて、産業上の大打撃を受けた。ところが今回の戰爭の結果として、佛國と獨逸の位置が全然反對となつた。丁度一八七〇年戰爭後の佛國の位置が獨逸の夫れで、戰勝獨逸の地位が佛國の夫れとなつて終つた。獨逸は協商國側の非戰鬪員に對して與へたる損害の賠償として五百億圓を要求され、然して協商國の戰費は恐らく此れが十倍に上るであろう。此れを出來るだけ拂はせられることになると非常な打撃である。獨逸は尙ほ自分自身の戰費や國債の始末をせなければならぬ。此れもなかなかの巨額である。尤も獨逸國內の國債は此れを破棄することが出來ぬでもないが、斯る手段を取ることは資本家を破滅せしめ、延いて社會の大動搖を來す原因となるから、輕々に實行さるべき事件ではない。結局は增稅其の他の形式により て、國民一般から絞り出さなければならぬ。一九一五年八月二十日獨逸は既に其の作戰に非常なる失敗を演じたる後、戰相ヘルフェーリッヒは議會に於いて下の

如くに述べた。

『敵が吾人の不可侵を認めず、吾人を破り得との信念の下に繼續する以上、吾人は彼れらが其の謬まりを覺るまで前進せざるべからず。すなはち我れ〳〵は戰ひを續け、戰ひが齎らす犧牲は此れを甘受せなければならぬ。此の犧牲のうち金錢に關するものは、政府は再び國債に賴る事と爲した。其の理由は三月に於いて此の席にて述べたると同じ理由である。政府は出來るだけ戰時特別稅による負擔を、既に過分の負擔を課せられ居る國民に課せんことを欲せず。戰費は今急を要する問題ではない。神の冥助によりて、獨逸が勝利を得たる後に於いて語るも、敢て晩いことはない。將來の獨逸國民は出來得るだけ、此の戰爭の犧牲から免除されなければならぬ。何十億否何百億の戰費は此の戰爭を招來したる國(英佛等を指すの適當に負擔すべきところのものである。願はくば此の巨額の負擔により て、來るべき數十年の間我れ〳〵の敵を壓倒し去るを得ん』。

軍閥の呑氣、軍閥の空威張りも玆まで行けば寧ろお愛嬌である。英國すら戰時稅として二十億磅(二百億圓)の負擔を課して居る。それに獨逸は上の如き樂觀に拘泥して、戰爭を國債ばかりで遣り繰つて來た。結果は獨逸の戰後經營をして益々困難ならしめるのみである。普佛戰爭後の佛國よりも、今回戰後の獨逸の方が余ほど困難なる立場にある。ヘルフェーリッヒの『敵を數十年間壓倒』するは、反つて『獨逸を數十年間壓倒』することに變更された。

獨逸の協商國に對する支拂ひは、結局は物資を以つて爲されなければならぬ。物資と云ふも協商國は獨逸製品により自國の製品が驅逐され、若しくは價格を引下げらるゝを好まぬから、主として原料品を以て決濟されることになる。鑛産物は獨逸は非常なる富源を擁して居る。鐵、石炭、ポッターシュ、岩鹽などは戰前は殆んど無盡藏であつた。戰後と雖も尙ほ可なり殘つて居る。だから獨逸は此れらを以つて、其の支拂ひに當てるに相違ない。獨逸の擁する鑛産物(但し戰前の統計は次ぎの表によりて概略を知ることが出來る。

石炭埋沒量	四二三、三五六、〇〇〇、〇〇〇噸	二一一、六七八、〇〇〇、〇〇〇噸(一噸十志として)
鐵鑛　同上	四、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇(一噸五志として)
ポッターシュ　同上	五〇、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇	二五、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇(一噸十志として)
計		二三七、六七八、〇〇〇、〇〇〇

此の獨逸の埋沒鑛物が如何に重要なるかは、所謂英國の國富なるものが僅かに二百億磅に過ぎない、すなはち獨逸埋沒鑛物の十二分の一にしか當らぬと云ふこ

とによりて立證せらるゝ。ルール炭坑區だけでも二千百三十五億萬噸を含み、一噸十志としても一千六十七億八千三百萬磅の價値がある。

唯獨逸の鑛物は大部分其の西部及び東部に僻在して居る。然して此れは戰爭の結果として獨逸から取り上げらるゝことゝなつた。無論全部ではないが可なりの部分が失はれる。例へば鐵礦四十億噸のうち二十六億三千噸すなはち三分の二は、ローレン、ルクセムブルグに在り、然してルクセムブルグは過般佛國との關稅同盟に這入つたが、戰前までは、獨逸關稅同盟の一員であつた。だから鐵の三分の二は確實に失なはれる譯である。然かもローレン産の鐵は、其の成分が獨逸第一である。然して殘れる三分の一は十八箇所に散布されて居るから、採掘が不利益なるのみならず、鐵の質も餘り宜くはない。

だから戰後の獨逸の製鐵業は原則として非常に衰へることになる。戰前の製鐵業は獨逸實に世界に冠たり。英國所産の約三倍を産出し、其の進歩の著るしきこと米國と雖も遠く及ばず、實に直接間接に二百二十五萬人の勞働者を使役して居た。鐵の産額が三分の一に減ずれば、早い話しが二百二十五萬のうち百四十四萬人が業を喪なふことになる。斯うなると産業は打擊を受け、勞働者の需用が減

じ、從がつて人口の增殖も餘ほど遲緩となるであらう。

獨逸はまた鐵と共に石炭を失なふ。概して云へば獨逸は二箇の大なる炭坑地と一つの小なる炭坑區とを持つて居た。二箇の大なる炭坑區とは南部シレシアとルール地方である。ルール地方は昔しから獨逸國内に在り。從がつて此れは安全であるが、シレシアの炭坑は或は波蘭の有に歸するかも知れぬ。シレシア炭坑は一千六百五十九億八千七百萬噸の石炭を藏して居ると云はる。英國は一千八百九十五億三千五百萬噸の石炭を持つて居ると稱せらるゝから、英國全體を合せて漸やくシレシア一箇所に辛ふじて勝るの程度である。シレシアの如何に重大なるかは此れで分る。そこでシレシアをば波蘭に與へようと云ふに對して獨逸が反對し、結局人民投票と云ふことになつた。投票の結果シレシアが獨逸の有として殘るならば、獨逸の回復力は恐らく非常に迅速であらう。若し此れに反して波蘭のものとならば、獨逸の産業は非常なる打擊を受けることになる。

然るに一方に於いては佛國はアルサス、ローレンを取り其の豐富なる鐵鑛を利用し、恐らく雄大なる産業を築き上げるに至るであらう。然して産業の發達は勞働の需用を促がし、勞働の需用は人口を增殖せしむる。ルール地方の石炭も當分

はアルサス、ローレンの鐵礦を溶かすべく、賃金代りに佛國に送られる。だから當分は茲に産業を設立することは出來ない。然してシレシアを人民投票の結果獨逸から奪はれるやうになれば、獨逸の産業は少なくとも一時非常に沈滯するに決まつて居る。産業が沈滯すれば人口の增殖が遲々となる。一方の佛國が比較的急速に發展し、獨逸が遲れると漸次に佛國の地位は鞏固となるが原則となる。此の原則が確實に行なはれさへすれば、佛國が獨逸を怖れて、英米と三國同盟を結ぶ必要はないのである。それを怖れるのは戰前の獨逸とは正反對に、餘り自信が無さ過ぎる。蓋し國民が既に墮落して居るからである。然して更に獨逸の爲めに憂ふべきは、猶太人によりて代表せらるゝ資本が、國境を超えて佛國もしくは波蘭に移動するやうになるかも知れぬと云ふことである。獨逸が戰後重稅を資本に課するやうになれば、此の傾向は特に著しくなると見なければならぬ。然うなると獨逸の受ける打擊は二重である。原料が少なくなつて産業が振はぬ所に資本がなくなつたら、それこそ泣き面に蜂と云ふところである。此の可能は十分ある。猶太人は利益ある間こそ獨逸人であるが、利益が無いて見たら波蘭人ともなれば佛國人ともなる。此れは今回の戰爭で猶太系の紐育の銀行家ゼーコツプ・シツフ

氏が、日本が獨逸に開戰するを不都合なりとして日米協會を退會しながら、暫らくして米國が對獨戰爭に參加し、米國人は飽くまで米國人たらざるべからず、獨逸の爲めを計るが如きは不都合なりと云ふや、忽ち屁古垂れて終つて『余は如何なる場合も米人なり、獨逸を敵とするに異存なし』と公會の席で演說して、君子忽ち豹變して終つたのでも分る。彼れらは國家觀念を持たぬ。金すなはち彼れらの國家である。だから利を見て獨逸を退去するかも知れぬ。然る時獨逸の回復は困難の度を加ふる。獨逸の回復が困難となれば、獨逸が佛國に對抗することも困難である。獨逸が何らかの策を施こし富强を致すまでは、佛國は安心して可なりである。

第二十七章　新墺多利の將來

獨逸の將來と密接なる關係を有し得べきは、元との墺匈國内に在る獨逸人である。就中獨逸人の建設せる新墺多利である。新墺多利は其の土崩瓦解せる二重王國から分離せる時、無論獨逸との併合を希望して居つた。其の頃は獨逸は尚ほ帝政で、外觀は可なり確かりして居つた。新墺多利が自己防衛の立場から見ても、其の北方の同族獨逸と統一することは頗る必要のことであつた。此の必要は獨逸に帝政が仆れ、共和政體となり、協商國から極度に壓せられて、國運頗る振はざる狀態となれる今日に於ても、決して減じては居らぬ。只獨逸が弱ければ夫れだけ頼りになる程度が低いと云ふだけで、墺多利は依然として獨逸と運命を共にするの必要がある。何となれば墺多利は他に獨逸以上に有力なる友人が得られないからである。波蘭でも、チエック、スロヴアックでも、マギヤーでも、ユーゴ・スラヴでも、新墺多利の眞の味方たり得べきものはない。此れらの諸種族は或は敵となる可能性は十分にあるが、墺多利の味方たるべしとは考へられぬ。然うすると墺多利の頼るべきものは、獨逸一箇國と云ふことになる。況んや人種が純然たる獨逸

人であるから、此の統一は極めて容易である。獨逸共和國も其の憲法第六十一條に規定を設けて、墺多利の併合を豫想して居た。併しながら獨逸人が一致團結すると云ふことは、協商國の好まざるところである。そこで協商國は獨逸の内政に干渉して、此の六十一條を撤回させて終つた。協商國は民族主義、民族の自決を八釜しく云ふが、獨逸と墺多利との合併することは民族主義である。何となれば兩者とも人種を同一にするからである。人種を同じくするものが運命を共にすべく統一すると云ふことは、また民族自決主義の立場から見て然るべき事柄である。然るに協商國は此れを妨げんとし、且つ此れを妨ぐるに成功した。だから協商國の主義なるものも、極めて矛盾撞着に富んだものである。獨逸は協商國の要求通りに憲法第六十一條を撤回したけれども、此れは單に形式だけのことで、墺多利との併合を斷行しようと思つたら、方法は何うにでもつく。唯當分は協商國が小姑式に頑張つて居るから、或る時期の間は温和しくして居るであらう。

戰前の獨逸は六千七百萬の人口を持つて居た。然るに戰爭の結果としてアルサス、ローレンとシュレスウイッヒ、ホルシュタインと波蘭とを失なひ、此の人口合せて七百萬を減少した。すなはち六千萬となつた譯である。然るに元との墺匈

國内にある獨逸人は普通一千二百萬と稱せられて居たから、若し獨逸人が此れを合併すると七千二百萬の人口を擁することゝなり、結局戰前の狀態よりも有力になると云はれて居る。併しながら此の一千二百萬人は元との墺匈國全體に散在して居るものであつて、今の墺多利だけに集注して居るものではない。だから獨逸が墺多利を併せて得る數は、決して一千二百萬と云ふ數には上らぬ。最も墺多利が非常に繁榮する場合は、各地方に散在する獨逸人が、風を望んで墺多利に移住し來るに相違ないが、墺多利は下に述ぶるが如く、產業が非常に盛大に赴くとは思はれぬから、結局然う墺多利に獨逸人が集注して來ぬと云ふ結果になる。一九一〇年の國勢調査に據れば、元との墺匈國に在る獨逸人一千百九十八萬七千七百一人とあり、此れが次表の如くに分布されて居る。

地方別	獨逸人數
獨人墺多利諸州	六、一一八、五四六
墺多利の他州（ガリシア、ブーコウイナ等）	三一九、〇三八
チエック、スロヴアック諸州	三、五一二、六八二
匈牙利	二、〇三七、四三五
計	一一、九八七、七〇一

すなはち一千二百萬の獨逸人のうちで、巴威の延長とも云ふべき墺多利に住んで居るのは僅かに六百萬人、全體の半分である。殘り半分のうちの三百五十萬人はチエック、スロヴアックの國に住み、他の二百五十萬人は匈牙利とか、ガリシアとか、ブーコウイナとか非常に懸隔した地方に住んで居る。チエック、スロヴアックの國に住む獨逸人は、シレシア及びサクソニーに沿ふて狹長の帶を爲し、一の山脈を以つて境とせられて居るが、此れは場合によつては獨逸と合同する可能がある。然るに匈牙利とかガリシアとかブーコウイナに住む獨逸人は、土地が餘りに遠隔なのと、利益の關係が密接ならざるが爲めと二つの理由によりて、先づ獨逸に取つては合同は斷念せなければならぬ狀態にある。だから獨逸が元との墺匈國から吸收し得べき獨逸人は、墺多利の六百萬人とチエック、スロヴアックの國に住む三百五十萬合計九百五十萬人である。併しながら獨逸にしてアルサス、ローレン其の他によりて七百萬を失なつて、新たに九百五十萬を獲るとすれば、差引き二百五十萬の利益となる譯である。

一九一〇年の國勢調査によると、前揭チエック、スロヴアック諸州の獨逸人を細分したものは、ボヘミアに二百四十六萬七千七百二十四人（全人口の三割六分七厘

六毛モラヴィアに七十一萬九千四百三十五人(全人口の二割七分六厘二毛)墺領シレシアに三十二萬五千五百二十三人(全人口の四割三分九厘)の割合であつた。然るにチエック、スロヴアックの連中は此の統計は正確でないと主張して居る。政治的の關係から墺多利では獨逸人を、匈牙利ではマギヤーを實際以上に記入して居る。だから統計面にはチエック、スロヴアック諸州に三百五十萬以上の獨逸人が住んで居るやうに出て居るが實際は二百五十萬位のもの(ベネス教授の統計)であらうと云ふ。チエック、スロヴアックの主張は恐らく事實である。獨逸式に政治をある種の目的の爲めに自由自在に擔ね廻す弊害は、無論統計にまで及んで居る事と思はれる。併しながら假りにチエック、スロヴアック側の主張を全部容れるとしても、百萬人の差を生ずるのみで、墺多利とチエック、スロヴアックの國に居る獨逸人は合計八百五十萬人となる譯である。此の八百五十萬人が獨逸と合同する可能あるものである。

チエック、スロヴアック領となれるボヘミアは實に要害の地である。獨逸との國境はボヘミア森林、オール山脈、ジアイアント山脈、スーデット山脈によつて圍まれ、此れにモラヴイア及び墺領シレシアを加へると、實に天然の形勝を形ち造る。此の形勝を握つて居るのが新興チエック、スロヴアック國である。此の國は獨逸と墺多利との間に深く箝入して伯林と維納とを遮ぎり、且つ巴威を獨領シレシアから斷ち切つて居る。また其の位置がエルベ河に沿ふ大道を橫ぎるが故に、獨逸から維納、プラーグを經て黑海、君府、近東に出づる通路を扼して居る。斯う云ふ次第であるから、ボヘミアは昔しから中歐に於ける最も重要なる地點とせられ、ビスマークも『ボヘミアを支配するものは歐洲を支配し得る』と云つた。ライド敎授も其の著『歐洲大陸』(一九一三年出版)に於いて、ボヘミアの必要なる所以を論じて下の如く云つた。

『ボヘミアは廣袤は蘇格蘭の三分の二に當るに過ぎないが、墺多利に於いては最も重要なる州である。重要と云ふは經濟的に又歷史的に云ふものにして、然して此の重要は單に墺匈國のみに限らぬ。ボヘミアは實に瑞西以上に歐洲の心臟なり。ボヘミアは有らゆる海より略同一の距離にあり。外界からは鬱蒼たる山脈によりて遮斷せられて居れど、然かもサクソニー、モラヴイア等によりて此れらの外洋と接觸を保ち、然して一方にエルベ他方にダニューブ流域に對して、此れを兩天秤に掛くるの地に居り、數世紀間に亘れる政治的中心であり、人種問題からも產

業關係からも、世界中最も重要なる地域の一つである』。

此の重要なる地域が今やチエック、スロヴアックの手に落ちたのである。若しチエック、スロヴアックが富強となれば、此れは獨逸の南下策に對して有力なる障害を與ふるのみならず、また常住獨逸に對する脅威となり、所謂『脇腹の荊棘』ともなる。此の故を以て獨逸は獨逸人の住する北部一帶の地を併せんとして、頗る努めたものである。併しながらチエックスロヴアックの立場から云へば、其の自然的國境の埒内に獨逸を闖入せしむることは極めて危險であるから、此の企圖に對しては硬強に反對して來た。だからチエック、スロヴアックが强くならず、反對に獨逸が富强に於いて先んずるやうの事があらば、獨逸の鋒は必らずやチエック、スロヴアックの國に向つて來るに相違ない。すなはち西に於いて白耳義とルクセムブルグとの役目を、東方に於いてボヘミア、モラヴイア、シレシアなどが勤めて居るのである。

次ぎは巴威に接して六百萬の獨逸人を包括する新墺多利に就いて述べる。一國の富强が結局するところ、其の國の有する經濟的實力によることは、既に繰返へし〳〵述べた通りである。大陸諸國に於いては商業は寧ろ局部的で、農業と工業とが重もなる產業である。そこで此れを新墺多利に適用して見ると、墺多利は農業も工業も、餘り羨むべき地位に居るとは云へぬ。新墺多利は一たいに山脈多く農業に適する平野少なく、農業よりも寧ろ林業に適して居る國柄である。從がつて食物も國内の需用を滿たすこと能はず、可なりの部分を外部から輸入せなければならぬ。戰爭前に於いては此の食物は主として、ボヘミア、モラヴイア、ガリシア、シレシアなどから輸入され、墺多利は此れに對して製造品を以つて支拂ひを濟まして居た、此の不滿足なる狀態は戰後も無論繼續さるべき性質のものである。ボヘミア、モラヴイア、ガリシアなどから輸入されなければならぬ。要するに墺多利は食物に於いて自足自給の域に居らぬのである。這般の消息は次ぎに掲ぐる一九一三年墺多利（舊）農產物產額表を一瞥すると極めて明白に分る。

品目	墺國の他の部分	墺國總計
小麥	四、二四八、九七八（クインタル）	一八、九五二、六三九（クインタル）
ライ麥	六、七五〇、五〇二	二九、七四八、〇三三
大麥	二、四二八、〇五八	一七、〇六五、七五六
オート麥	五、三九九、三一二	二四、三〇〇、九九八

ポルス豆	二、〇八五、九二二		四〇七、九一五
ハップ	一八〇、六八四		二〇、七七六
馬鈴薯	一〇五、五九六、八七五		一九、八一九、二三〇
砂糖大根	七四、〇一七、六三〇		五、二二〇、〇六五
煙草、人参等	二四、九四四、六〇五		一四、一二五、五七二
藷	一三六、一八四、〇六五		四六、六二四、三二八
馬	一、三二八、九七四頭		四七三、八七四頭
牛	五、七九三、三〇三		三、三六六、七〇六
豚	三、六二六、四八〇		二、八〇五、六〇〇

（註一クインタルは百封度）

すなはち知る一九一二年に於いてチエック、スロヴァックの諸州及び波蘭人の居住する州（ガリシア）が墺多利全體に産する小麥、オート麥、藷の四分の三を産し、ライ麥、バルス豆、馬鈴薯の六分の五を産し、大麥の七分の六を産し、ハップの十分の九、砂糖大根の十六分の十五を産したるを。此の優勢は家畜類に於いても維持され、此れらの諸州は墺國全體の三分の二（牛）、四分の三（馬）、五分の三（豚）を持つて居た。だから元の墺多利の農業上の富はチエック、スロヴァックの州と波蘭人の州とに集中されたかの觀あり、然して此れらの諸州は新しいチエック、スロヴァック國となつたのだから、此れらを除外せる新墺多利が農業國として貧弱なるは明白であらう。

次ぎに工業に就いても新墺多利は、餘り有望であるとは云へぬ。工業は機械により、機械は石炭に依頼し、然して石炭の性質上遠方から運搬し來ることを許さぬ。だから工業の發達は附近に石炭を産することを必要條件とする。一九一三年加奈陀で催ほされたる國際地質學大會に報告せられたる『世界の石炭富源』によれば、墺多利の石炭は他國と比較して下の如きものであつた。

獨逸	四二三、三五六、〇〇〇、〇〇〇噸
英國	一八九、五三五、〇〇〇、〇〇〇
墺多利	五三、八七六、〇〇〇、〇〇〇
匈牙利	一、七一七、〇〇〇、〇〇〇

すなはち英國や獨逸に比べて、墺多利や匈牙利の石炭は殆んど云ふに足りないものである。匈牙利に至りては皆無と云ふに近い。此れが墺匈國に工業が起らず、然して特に匈牙利が農業國として終始した理由である。墺多利は匈牙利に比べると大に有利の地にあるが、此れは舊墺多利のことであつて新墺多利のことではない。墺多利の産炭地はボヘミア、モラヴィア、シレシア、ガリシアに在り、獨逸人の居住する部分にはない。此れが戰前墺多利の工業が此れらチエック、スロヴァッ

クや波蘭人の州に在り、獨逸人の居る墺多利の部分に存在せなかつた理由である。戰爭の結果として此れらの産炭地は、新墺多利の領分以外となつて終つたから新墺多利の工業が振はざるは勿論、産業地が外國のものとなつた丈け、戰前よりも困難なる狀態に陷る譯である。

そこでチエック、スロヴアックの州と獨逸人の州とに於ける工業狀態を觀察する。ボヘミアは農業工業に於いて自然の寵を一身に集めたる概あり、農産物は前述の通りであり、また工業も硝子、陶磁器、音樂器械などは世界を通じて有名である。製鐵業もボヘミアのピルゼン附近のスコダが中心であり、墺多利の大砲は玆で造られる。墺多利全體の産する麥酒の半分もボヘミアで出來る。ピルゼン麥酒と云ふのが有名である。其の他織物業、皮革業、レース、化學藥品が出で、鑛物と鑛泉とに富んで居る。カールスバッド、マリエンバッド、フランツエンバッドなどがあり、バッドと云ふは浴場と云ふ意味である。斯ふ云ふ譯であるから墺多利の輸出は其大部分をボヘミアから産出し、從がつてエルベ河によりてハムブルダに出たものである。次ぎに一九一二年の統計によりて、舊墺國中チエック、スロヴアック及び波蘭人の州と殘餘の州との工業的趨勢を比較する。

項目	ボヘミア、モラヴイア、シレシア、ガリシア	他の諸州	墺國全體計
工場數	一〇、〇四四個	六、八八五	一六、九二九
機關數	二八、八六八個	一〇、七〇二	三九、五七〇
砂糖産額	四三、六八五、四七三 クインタル	四、三三三、七七〇	四八、〇一九、二四三
酒類産額	一四、七六四、三二六 ヘクトリートル	七、九四五、一〇五	二二、七〇九、四三一

（註、クインタルは百封度、ヘクトリートルは約五斗五升四合）

以上述べたるところを綜合すれば、墺多利中チエック、スロヴアック及び波蘭人の居住する諸州は、農産、鑛産、工業に於いて遙かに他の部分を凌駕して居るから、從がつて遙かに富有なるべき筈である。此れは租稅上り高を比較して見ると然ることが立證さるゝ。

	ボヘミア、モラヴイア、シレシア、ガリシア	墺多利合計
一九一一年消費稅	三四一、九九五、〇九〇 クローネ	四四五、七一二、三一九
一九一二年地租	四四、二〇九、一九六	六九、二五九、五二一

（註一クローネは四十八錢）

此れを要するに獨逸人部墺多利は、他の部分によりて生活して來たものである。換言すれば他の部分を喰つて活きて來たのである。維納は戰前富强の外觀を有

して居たけれども、此れは維納の生じたる富でもない。他の部分からチエックや、波蘭人や、羅馬尼人や、露西亞人や、希臘人が持ち來つた富である。維納は要するに一種の寄生木であつた。自からは根を持つて居らぬ。

然るに戰爭が起り此の形勢は俄然として變じた。維納に大名生活を爲せる獨逸人も、ボヘミアか、ガリシアか、或は匈牙利に土地を持つて居るものは、銘々の領地に歸つて其處に歸化するか、或は領地を賣り拂つて塊多利に止まるか、何つちかにならなければならぬ。何つちにしても地方から吸ひ取つた富を塊多利に持ち込むことが出來なくなるから、塊多利の水の手は切れて終ふ譯である。獨逸人以外のチエック、スロヴアックとか、波蘭人とか、マギヤーとか云ふ連中は無論維納を顧みなくなるから、其の富を銘々の首都に持ち込んで使ふと云ふ事になる。斯くして維納は自然の順序として衰ろへなければならぬ。維納は人口二百萬。然して新塊多利の人口は六百萬人であるから、とても此の大都會を維持して行くことの出來る筈がない。維納は衰ろへてプラーグとか、ブダペストとか、ベルグラードとか、或は他の都會と同一列になるであらう。

第二十八章　亡びたる獨逸植民地（政治的）

世界大戰の前に於いては、獨逸は地球上五指の中に屈せらるゝ一大植民帝國を形成し、歐羅巴以外に於いて約百十二萬方哩の面積と一千四百六十萬の人口とを支配して居つた。此れらの植民地は、植民地獲得競爭に於いて著しく立ち遲れた獨逸が、僅々三十餘年の短日月間に種々の手段を廻らして、漸やく手に入れたものであつた。然るに大戰の勃發後、さしも歐羅巴の三分の一に該當する大植民地も、三年經つか經たぬかに殆んど全部を協商國側の軍事占領に委し、更に終局の講和條約の結果として、此れら尨大なる植民地は寸土をも剩さず吐き出さなければならなくなつた。斯うなつて見ると曩きの三十餘年に亘る獨逸の植民地を得んとして費やした努力は、實は甚だしく徒勞なものであつたと云はなければならぬ。以下獨逸植民地の經濟上の價値、隣接諸國との關係、植民地の處分、植民政策上より觀たる獨逸國民の將來等に就きて說述するこゝする。然して獨領各植民地は既に獨領ならずと雖も、說明の便宜上依然舊來の名稱を以て呼ぶことは豫め讀者の了解を得たいところである。

先づ大戰前に於ける獨逸植民地を掲ぐれば次ぎの如くである。

獨領東部阿非利加	三八四、一八〇方哩
獨領西南阿非利加	三二二、二〇〇
カメルーン(新カメルーン共)	二九〇、〇〇〇
トーゴーランド	三三、七〇〇
カイゼル・ウイルヘルムスランド	七〇、〇〇〇
ビスマーク群島	二〇、〇〇〇
ソロモン群島	四、二〇〇
マーシヤル群島	一五〇
カロリン群島(ペレウ群島を含む)	五六〇
マリアナ群島	二五〇
サモア群島(サヴアイ及ウポルー)	一〇、〇〇〇
膠州灣租借地	二〇〇

以上の諸植民地の面積總計は約百十二萬方哩であつて、獨逸本國の約六倍に相當する。さらに他の比較を取れば、獨逸、英國、佛蘭西、墺匈國、伊國、塞維、葡萄牙及び勃牙利を此の廣袤内に收むるに足り、また日本全面積(但し朝鮮を除く)の約八倍である。此れら植民地は膠州灣租借地を除くの外、何れも熱帶圏内に位置を占め、唯だ西南阿弗利加の南半のみが亞熱帶に屬して居る。だから獨逸にして此れが開發の秘鑰さへ握つたならば、此れをして一大富源たらしめ得べきは明らかなることである。然るに實際は如何と見れば獨逸の植民帝國は、獨逸國民の發展に取つて殆んど何等の意義なく、植民地と云ふ名義はあつても、其の實は何もなかつた。すなはち其の百十二萬餘方哩の植民地内に居住せる獨逸人は大戰勃發の前年(一九一三年)に於て僅々二萬弱、其の他の白人全部を加算するも二萬五千を出でない有樣であつた。然かも當時獨逸人海外發展の必要は極度に緊迫し、終に國命を賭してまで英佛露等を向ふに廻して世界戰を敢行するに至らしめた程である。一八八〇年に四千五百萬であつた獨逸人口は三十年後の一九一〇年に六千五百萬に膨脹し、尚ほ年々七八十萬の增殖は確かであると思はれた。然して此の三十年間に獨逸人の海外に渡航せる者二百萬以上に達した。然るに此の二百餘萬の獨逸人中自國の植民地に移住した者は其の百分の一に當る二萬人にすら遠く及ばざる貧弱の狀態で、大半は自由の天地にして然かも文明の恩澤に浴し得る北米合衆國、加奈陀、濠洲及び南米諸國(主としてブラジル)に向つたのである。獨逸政府は斯く多數の貴重なる獨逸人の外國に移住するを惜んで、秩序整然たる宣傳運動を行ひ、皇族を總裁に戴ける植民協會を起したり、新聞紙を買收して『外國移住者は賣國

奴なり、忠誠なる獨逸人は須らく獨逸植民地に向ふべし』など云ふ議論を書き立てさせたけれども、此れらの努力は一向無益であつた。年々の增殖人口の約一割すなはち平均六萬五千位の獨逸人は、自國植民地を横目に睨んで米洲大陸に飛び出してしまつた。神妙に阿非利加大陸や南太平洋の獨逸植民地へ志す者は、年々一千人有るか無いかの有樣であつた。

斯かる狀態であるとすれば、獨逸の有する植民地百十二萬餘方哩は畢竟國民の負擔に對する荷厄介たらざるを得ない。比較的信憑すべき統計に據れば大戰開始の間際に於ける獨逸人植民は、獨領西南阿非利加に約一萬二千人——此れらは該地方に產する金剛石に釣られて寄り集つた一時的移民が十の八九に居り、殘餘は文武吏員や商事會社員等である——獨領東部阿非利加に約二千人、カメルーンに約一千人、トーゴーランドに約三百人、南太平洋の獨領諸島に約八百人、總計一萬六千人前後に過ぎなかつた。之を百十二萬方哩に割り當つれば實に七十方哩に就き一人の獨逸人あるのみと云ふことになる。七十方哩に一人では、獨逸植民地は中味の無い風袋。本尊無しの空寺と云はなければならぬ。斯るは獨逸植民政策の失敗として揭記せらるべき事項。其の原因は後に述ぶるが、協商國側諸國は此の

失敗の後を引受けて、今や其の植民地乃至原料產地としての眞價を發揮せしむべき地位に立つて居る譯である。

獨逸植民政策史の第一頁は一八八四年の四月を以つて開かれた。同月獨逸宰相ビスマークはケープ・タウン駐劄の獨逸領事に對し、ルーデリッツランドを獨逸保護領と爲すべき旨公認を與へたのである。ルーデリッツランドなるものは一八八二年獨逸ブレーメン市のルーデリッツなる男が私費を擲つて設けた一の通商根據地に過ぎなかつたのである。此れが後に至りて獨逸本國面積の一倍半に相當する獨逸西南阿非利加の濫觴を成したのであるから妙なものである。然かも斯くして開始せられたる獨逸の海外發展は其の後急速度を以つて行なはれ、同じ年の七月中旬にはトーゴーランドもカメルーンも獨逸の保護領となつた。トーゴーランドは其の以前に於ては歐洲通商の一中心地たりしに過ぎず、主要港クライン・ポーポーには三個の獨逸商店、二個の佛國商店、及び一個の英國商店が開業して居たのみで、トーゴーランド全部を探し廻つても歐洲人の住めさうな家屋は十軒有るか無いかの有樣であつた。そこへ一八八四年七月十日の早朝、西阿非利加駐在獨逸總領事と云ふ肩書付きでナハチガル博士が乘り込み來り、ポーポー港頭高く

獨逸國旗を掲げた。それから四五日の後には、ナハチガル博士は早くもカメルーン河口のデュアラ沖に投錨し、デュアラ族の國王ベル以下諸酋長と電光石火的交渉を遂げ、七月十五日夜半カメルーンをして獨逸の支配下に立たしむべき條約に調印せしめた。斯くてナハチガル博士は僅々一週間以内の時日で二十二萬方哩すなはち獨逸本國よりも稍〻大なる面積の植民地を握るの素地を作つたのである。國王ベルは元來英國商人と親好關係を持續すること二十年に亘つて居たから、英國領事ヒウエット氏がナハチガル博士の機先を制してデュアラに來着したならば、カメルーンは英國のものとなつて居たかも知れぬ。英國領事は五日後れて來着した爲めに此の好機をむざ〳〵と逸し去つた。

ナハチガル博士の活躍と時を同じうしてカール・ペテルス博士は、東阿非利加方面に活躍を開始し、同年末までに獨逸最大の植民地たる獨領東部阿非利加獲得の一階段を築くに至つた。すなはち彼は十二箇の條約を土族酋長と結んでウセグハ、ヌグルウ、ウサガラ、ウカミ等諸部落を包括し、南部獨逸に匹敵するに足るの地域を獨逸に歸屬せしめたのである。次いで一八九〇年には獨逸は四百萬馬克約二百萬圓を與へてザンジバールの酋長（サルタン）より東部阿非利加の沿海地方一帶を、五十箇年の期限で讓り受けた。此れは名目は五十箇年の期限はあるが、事實上永久的割讓たるは無論のことである。そこで從來カール・ペテルス特許東阿會社に委託せられて居た統治權は獨逸帝國政府の手に回收せられ、最近に至るまで獨領東部阿非利加と呼ばるゝに至つた。

ニユー・ギニアに於ては獨逸は一八八四年英國の好意に依りニユー・ギニア分割協定の一員となり、翌一八八五年五月獨逸政府より『ニユー・ギニア會社』に對し保護認可狀の交付あり、翌年五月更に司法權をも同會社に委託したけれども紛議續出し、結局一八九六年一切の統治行政の權利を政府に返還することゝなつた。現在のカイゼル・ウイルヘルムスランド、ビスマーク群島及びソロモン群島すなはち此れである。

カロリン、ペレウ、マリアナ（グワム島を除く）諸群島は一八九九年二月十二日の條約に依り、西班牙より獨逸に千六百八十萬馬克（八百四十萬圓）を以つて讓り渡したのである。此れらは大戰勃發までにはニユー・ギニア保護領の管轄に屬して居た。またマーシャル群島は一九〇六年四月ヤルイト會社から獨逸政府に回收したものである。

一八九九年十一月の英米獨三國協定に依り、英國はサモア群島に對する主張權を拋棄し、サヴァイ及びウポルー兩島は獨逸の屬領となつた。

獨逸の國民は植民地の獲得維持の爲めには、少からぬ膏血を絞られたものである。正式の行政費として何ら差支無きものすら、機密費として取扱はるゝもの多かりし爲め、果して幾何の費用を要したかを的確に研究することは不可能。唯だその概略を推定し得るに止まるが、大體に於いて最初の二十五箇年乃至三十箇年間の熱帶植民地行政補助金は一平方哩に就き年額約十圓と云ふのが一致したる結論である。若し此の割合で計算すれば開戰當時までの獨逸植民行政補助の出費は無慮三億圓に達したことになる。さらに二千六百哩に亘る鐵道其の他諸工作物の建設費にも亦約三億圓を要したと思はれる。獨領西南阿非利加の鐵道費のみですら、六千六百五十萬圓を要したと云ふ位であるから、全額三億圓は寧ろ少額に失する位のものである。併しながらも兎も角も鐵道建設費を三億と見ると行政補助と合せて六億圓となる。然して別に軍事的經費も少なくとも三億圓に達したと見ねばならぬ。獨逸の植民政策通ボーン教授の說に從がへば、獨逸政府は西南阿非利加土民との戰爭のみにても約二億圓を費やしたとのことである。

だから茲に軍事費三億圓と見積るのは決して不當ではない。右の三項目を通算すれば九億圓である。從つて獨逸國民が植民地の爲めに、直接徵稅吏に支拂つた金額は、恐らく十億圓に近いものであると云へる。

右の計算が如何に內輪の見積りなるかは、次ぎに揭ぐる戰爭前年（一九一三年）の植民地補助費を參照せば一目瞭然である。

トーゴーランド	無し
カメルーン	三、一八〇、〇〇〇圓
獨領西南阿非利加	二四、一三〇、〇〇〇
獨領東部阿非利加	二〇、四九〇、〇〇〇
膠州灣	四、七八〇、〇〇〇
太平洋諸島	八二五、〇〇〇
合計	五三、四〇五、〇〇〇

此の割合が毎年〳〵繼續するものとすれば、直接の植民費のみで十六億圓に達することになる。但し獨逸政府の植民費が年額六千萬圓に上れるは過去十二箇年來のことで、其の間の經費累計約七億二千萬圓である。其の以前に在りては之よりも遙かに少額で濟んだのだから、獨逸國民に對する直接負擔は十億圓乃至十

六億圓の間に在ると考へて間違はない。

然れども植民地の爲めに拂つた獨逸人の犧牲は、以上の數字に表はされた金額だけにあらざることは勿論である。此の外に數字に表はし難い幾多の人命及び勞力の費消をも加算せぬばならぬ。

斯の如く獨逸が金錢と人命とを惜氣もなく拋つて廣漠たる地域を維持せんと力めたのは何故であるか。實に其の年々脹膨して止まざる過剩人口の捌き口を求めんとしたに在る。獨逸植民協會（拓殖會社）は何れも其の規則書の卷頭に『獨逸の利益』『獨逸の移民』『獨逸國民の植民計畫』と云ふやうに『獨逸』と云ふ語を冠した辭句を盛んに用ひ、未だ曾て土着民の保育とか未開地の指導とか云ふ辭句を用ひたことがない。すなはち獨逸植民地は專ら獨逸人の爲めの植民地で、土着民の休戚などは何うでも宜いのである。自國の過剩人口の爲めに『日向（ひなた）の地』を求めると云ふのが獨逸植民政策の全部であつた。此れは英國の植民政策とは著しく異なる所である。英國が今日の如き大植民帝國を成せるは、先づ自己の利益を圖るにありしこと勿論であるが、同時に土着民の利益を圖ることを忘れなかつた。或は少なくとも忘れないやうな外觀を裝ふことを忘れなかつた。換言すれば英國

も獨逸と同じく我利的なりと雖も、努めて婉曲なる態度——時には優柔不斷との譏をさへ受くる程の態度——を執り、獨逸の如き露骨且つ傍若無人なる手段に訴へることを避けた。

斯くの如く獨逸の植民地は獨逸人の移植を目的として居たに拘らず、前に述べた通り獨逸は一八八〇年から一九一〇年の三十箇年間に約二百萬人を國外に送り出せるに拘らず、其の大多數は自國植民地を厭ひて米洲大陸に赴き、大戰勃發當時に於ける獨逸植民地の獨逸人總計は一萬六千人前後。然して其の內でも純然たる移住民は恐らく一萬人を超えなかつたと云ふ程度である。二百餘萬人の海外渡航者中、僅々一萬人弱を自國植民地に收容し得たに過ぎぬとは、失敗もまた餘りに甚だしいと云ふべきである。此れは一面から見れば、先進の諸大植民國の拾ひ遺しを掻き集めた獨逸植民地としては、其の不利なる天然の情勢が之を然らしめたものだとも云ひ得る。凡そ白人の植民地として理想的發達を遂げしめんとせば、先づ其の土地が白人の家庭生活に適應することを必要とする。すなはち終生の地として定住し、家庭の團欒を樂み、健全なる兒童を養育し之に相當の敎育を與へ得ることを必要とする。此の事若し可能ならば其の地は植民に適すべきも、

若し不可能ならば如何に巨額の經費を注入するも、如何に周到なる計畫を立つるも、此れを化して白人の植民地たらしむることは到底問題外である。獨逸の識者が此の悲しむべき自國植民地の缺點に心付いたのは、漸く大戰前兩三年のことであつた。ボーン敎授の如きも植民學院の講演に於いて左の如く述べて居る。

『吾人は誤つて自國植民地の將來に就き多大の望みを囑して居た。吾人は植民事業開始以來自國の移住民を阿非利加に集中せしめんと欲した。吾人は阿非利加に一箇の新獨逸を建設し、濠洲及び加奈陀の英帝國に於けるが如き『娘邦』を此の中に包有せしめんと欲した。吾人は此の目的に向つて盲目的に突進した。然かも吾人は今以て一箇の新獨逸をも建設し得ないのである』。

此の獨逸植民政策の慘澹たる失敗は今回大戰を喚び起す一原因となつて居る。年々七八十萬の人口增殖を來さんとする獨逸が、自國植民地の價値に於て全然屑物たるを覺知すると同時に、過剩人口の捌き口の自國植民地にあらずして却つて英米國旗下に在るを見るに及んで、燥心焦慮、專ら英米植民地の橫奪策に沒頭するに至るは寧ろ理の自然である。世界の反感を挑發せる獨逸對外政策の陰險惡辣も、要するに其の植民地經營に絕望したのに基因するところ決して尠少でない。

獨逸植民地の發達に對する致命傷は、單り白人の居住に適せざることのみに止まらず、植民地其のものゝ人口の稀薄なることも亦看過すべからざる事項である。百二十萬餘方哩の廣漠たる獨逸植民地の人口總計は僅かに一千四百六十萬人前後である。實に一方哩につき十三人弱の密度であつて、之を獨逸本國の人口密度に比すれば約二十四分の一である。斯る人口稀薄の地域を開發するの方法は三つある。すなはち

（一）母國より白人を移住せしめて植民地としての實効を擧げしむること

（二）土着民の保存及び增殖を圖ること

（三）比較的人口稠密なる諸國より勞働者を來住せしむること

此れである。右のうち獨逸が第一策に失敗せるは既に述べたる通りである。然らば第二策及び第三策は如何。此れらも悉く散々の失敗に終つたのである。

獨逸の極端なる母國中心主義は、其の植民地の官廳及び商事會社の措置に就いても遺憾なく發揮せられ、爲めに獨逸人は母國を棄てゝ待遇不平等の植民地に赴むくことを好まなかつた。そこで獨逸は第二策に取りかゝり、土着民を植民地開拓の器械に供せんと企てたが、そこは獨逸人のことだから土人に對し文字通りに

器械同然の冷酷なる取扱ひを爲した。熱帶地方の土民を、獨逸流の煩雜生硬なる軍隊的規則を以て律せんと試むるのが、此れが抑も〳〵の間違ひである。丁度小供に大人の甲冑を着けさせて、戰場に送り出すやうなものである。とても効果を收め得べき道理がない。土人を使用して植民地の開發を圖るは、或る程度まで土人と同化せなければならぬ。それを嫌でも應でも獨逸式の訓練の下に置かふとするのは、間遠つた考へである。斯くして土人の能率は低下し、德義上のみならず、經濟上にも非常な損失を招く。

英國の植民政策の成功の秘訣は、土人生產者に十分なる注意を拂ひ、彼等を鼓舞し、彼等を敎育し、彼等の裁植、收獲、取引を補助指導することに在る。英國は白人をして直接に農園を經營せしむることは、管理監督に當るべき白人に對し多額の給料を要し、折角の利益を減殺するのみならず、また無益に白人の生命と勞力とを消耗するものであると云ふことを知つて居る。そこで英國は此れらの勞働は土着生產者に一任し、英人は只彼れらを指導鼓舞し、彼等をして十分なる收穫を得せしめ、英國は生產者ではなく、商人として此れらの產物を賣買することによりて得らるゝ利益に滿足して居る。此れが成功の秘訣である。

然るに獨逸人は全然此れと異なつて居る。阿非利加に獨逸人が來る迄は、そこは自然の樂園であつた。大河は萬年の昔より以來の悠々たる流れを海洋に向つて運ばせ、數多の動物は文明と呼ぶ慌だしい事物に煩はされずして千古の原始的森林の蔭を心暢かに彷徨して居た。斯かる平靜なる雰圍氣の裡に在る土人は時計も要せず、曆日も要せずして、心の儘に其の草深い家鄕を樂しんで居た。そこに突如として獨逸人が闖入し來り樂園は滅茶〳〵となつた。獨逸人の煩細複雜にして然かも器械的なる制度は、其の本國の獨逸に於てこそ立派に運用せらるゝと云へ、之を從來文明と沒交涉なりし土人に適用して、彼れらの數世紀、否十數世紀は落伍せる開化程度を强制して、十數年內に自國の科學的組織に順應せしめんと試みるに至つては、可なりの愚擧と云はねばならぬ。其の愚擧たるの程度に相應して、結果も亦頗る悲慘なるものであつた。土人の諸部落は此の規則ずくめに反抗して起ち、之を取り除かんが爲め死力を盡して鬪つた。然して憐むべき彼等は忽ち文明の利器により容赦無く屠殺せられ、纔かに死を免れたる者も氣力無く希望無き集團として、衰滅の日を待つ運命に陷るに至つた。

獨逸人移住者が如何なる態度を以て土人に接したかは、大戰前刊行の『カメルー

ン・ポスト』紙(一九一四年五月二日刊行)に記載せられた論説に徴しても之を察するに難くはない。同紙の記者は土人は何の爲に存在するものなりやと問ひ、答へて曰く

『若し土人に勢働を強制せざらんか、此の植民地(カメルーン)の前途を如何にせん。勢働を強制せざれば、吾人の輸出入は發展を期すべからず。吾人は何の爲めに植民地を有するか。若し彼れらが勢働に服するを肯んせずとせば、土人は果して吾人に取りて何の用途かある』。

すなはち獨逸人の態度は徹頭徹尾自己本位である。然かも其の自己本位を圓滿に遂行せんと欲すれば、土人の助けを借らざるべからざるを忘れて、強制しさへすれば土人は唯々として命を聞くと考へて居る。非常な近視的の意見である。然れば一般に親獨論者と目せられたる阿非利加通のイー・デー・モーレル氏も、流石に此の獨逸人の勝手な議論には呆れ果てたと見え次ぎの如き論駁を加へて居る。

『彼れら土人は單に白人の使役物として取扱はるゝことに對して始めは消極的に反對する。若し此れを強制せんとせば、彼れらは益に積極的に反對する。尤も彼れらの反對は、何の苦もなく憲兵の威嚇によつて揉み消され得る。併しながら此れ單に表面のみ。彼れらの心裡には何らの變化を來さしむる能はず、否此れが爲めに却つて金錢を徒費せしめられ、事業を停滯せしめらるゝこと夥しい。然して此の上更に執拗に強制手段を持續せば、彼等は終に最後の手段を採る。最後の手段とは土人が片端から死滅することである。だからカメルーン・ポスト紙の「何の爲めに吾人は植民地を有するか」との疑問に對しては、下の如く答へることが出來る。すなはち獨逸人は植民地の領有に依りて何らの敎訓をも得ざりし故に、彼れらの植民地を有することは、畢竟何の爲めにもならなかつたと云ふに在る』。

獨逸人の土人に對する態度は『白人專制』の語に盡きて居る。放縱なる熱帶地方の土人に取りては、器械扱ひを受くることは、奴隷扱ひを受くるよりも却つて數層の苦痛に相違無い。英國の熱帶農業研究家として知らるゝハメル・スミス氏は其の主宰する『トロピカル・ライフ』誌上にて、獨誌『トローペンプフランツエル』が獨逸は須らくカメルーンに於て一層寬大なる政策を執るべしと云へる議論を評して、左の如くに述べた。

『獨逸はバクウイリ族やデユアラ族(共にカメルーンの土着人種)を善用し得ず、既にヘレロ族に就きても失敗せり。獨逸人は彼れら憐むべき未開人種が獨逸本國人

民の如く、獨逸式の阿非利加統治方法を理解する能はざりし爲めに之を處罰せり』。

全く夫れに相違ない。又一九一三年春期英領東部阿非利加に開催せられたる勞働協議會に於て、獨逸の遣り口に就いて二人の者が證言を爲した。獨領東部阿非利加より來れる一土人は曰く

『我が部落の酋長は獨逸政府の命令により、農園竝びに政府事業の爲めに、一定數の勞働者を供給することになつて居る。若し酋長の命の儘に夫役に從事するを肯んぜざる時は、忽ち政府に引渡されて所罰を受けねばならぬ』。

さらに同植民地より來れる知名の一獨逸人は右土人證言の後を承けて次ぎの如く云つた。

『獨領東部阿非利加に於いては、勞銀は政府に依つて決定される。酋長は其の供給すべき勞働者の數を政府より通達せられ、夫役に出でた土人の租稅は半減せられることになつて居る』。

すなはち獨逸の植民政策は土人の利害をば全然眼中に置かずして、一意彼れらを白人の器械として使役するに在る。斯くて獨逸人の手を染むる地域は土人の人口は增加せず、却つて減少の傾向を示すに至る。

獨逸政府筋の公報には植民地土人の境遇を說述するは稀れであつたが、それでも獨逸國民中にも相當の具眼者が無いでもなかつた。舊敎黨中央黨の一領袖は獨逸議會（一九一四年二月）に於いて怒號して曰く『余は土人に對する虐待竝びに勞働强制を防止すべき斷乎たる措置が講ぜられざる限り、植民地に就いての支出には一切贊成投票を與へない考へである。熱帶農園に於いて失なはれたる土人の生命は往年の奴隷よりも遙かに優つて居るではないか』と。當時の植民大臣ゾルフ博士も亦此の非難演說を辯駁せず、單に政府が土人の爲めに努力を怠らざる旨を答へ、且つゾルフ博士自身もカメルーンに於て其の悲しむべき狀況を親しく目擊せる旨を附言した。

獨逸の苛酷なる植民政策は、啻に直接多數の土人の生命を奪ひ去つたのみならず、其の煩鎖なる規則責めを以て到處の土人部落の精神を萎靡悄沈せしめ、其結果として土人の產業上及び生活上の能力を顯廢せしめ、延いて人口の減退を來さしめた。大たい熱帶地方の土人程快活なる種族は、温帶地方及び寒帶地方では見出し難いけれども、一度彼等に暴虐者の壓迫を加へ沈鬱に陷いれたる場合には、其の蒙る生理的損害はまた此れに比例して甚深なるものである。

一九一四年一月ボーン敎授は植民學院に於ける講演中、獨逸の土人に對する待遇に就き卒直に告白して云つた。『獨領西南阿非利加に於いては、征服戰爭の結果として、敗殘のヘレロ族竝びにホッテントット族は事實上離散せしめられ、彼れらの所有地は押收せられ、其の一部には獨逸移住民が據つて居る』。敎授はまた說いて曰く『西南阿非利加に於いて、吾人は部落生活を壓碎して土人問題を終止せしめたは宜いが、其の代りに勞動の缺乏を惹き起した』と。更に獨逸の植民制度を批評して曰く『吾人は天帝の使命を奉ずる者を以て自任せんと試みた。然して吾人の淺慮に依りて叛亂を起すに至りたる土着種族を鏖滅せんと試みた。吾人は首尾好く此の企てに成功した。併しながら見よ、吾人は今日尙ほ一箇の新獨逸をも造り出し得ないではないか』と。

また南阿非利加の勞働管理者として知らるゝブリッチャード中佐は、大戰開始の少しく以前に獨領西南阿非利加より歸來して、倫敦の阿非利加協會の歡迎晩餐會に臨み左の如くに述べて居る。

『風說によれば獨逸人は土人に對して屢々怖るべき蠻行を加へ、殊にヘレロ戰爭に於いて捕へられたる婦女小兒を虐待し、或は慘殺し、或は一滴の水も求め難き沙

漠に放逐し、或は海岸不毛の地に拘禁して饑渴に由りて死亡せしめられたと云ふ。余は自ら西南阿非利加を視察して、此等の風說は決して虛僞ではないと云ふ結論に到達するの外はなかつた。ヘレロ種族の人口は叛亂中竝びに其の後の獨逸人の蠻行により三萬乃至四萬人の減少を來したと推算される』。

若し一九〇四年のヘレロ族征伐のみで、西南阿非利加の人口が三四萬の減少を見たとせば、三十箇年に亘る獨逸の植民行政が土人に對して如何に恐るべき影響を與へたかは、蓋し想ひ半ばに過ぐるものがあらう。獨領西南阿非利加の最初の人口が幾何ありしやは不明なれど、今日殘存せる人口は多くも二十萬を超えないと思はれる。一般には十四五萬と推算せられ、或は十萬前後なるべしと說く者もある。此の少數の人口が三十二萬餘方哩の茫漠たる地域に散布し、阿非利加大陸第一の人煙稀薄なる地域となつて居るのである。すなはち七千萬人に近い人口を包有する獨逸本國に比し約一倍半に相當する地域に、僅かに十四五萬の人口あるのみ。一方哩につき實に約二人と云ふ稀薄な程度である。獨領西南阿非利加は、果して最初から斯の如く極端に無人の境に近いものであつたらうか。試みに隣接諸植民地の人口密度を檢すれば、葡領のアンゴラは一方哩に付き約十人白耳

義領コンゴーは同じく約八人、英領のローデシアは同じく約九人である。故に獨領西南阿非利加の本來の人口密度は、一方哩に付き少くとも二人以上なりしと見るのは決して過大ではなからう。さすれば當初の人口は餘程内輪に算定するも七十五萬乃至一百萬なりし結果となる。これが今は十萬乃至二十萬となつて終つたのである。

土人の人口減退は獨り西南阿非利加に止まらず、他の獨領植民地に於ても亦之を見るのである。トーゴーランドに隣接せる英領黄金海岸に於いて刊行さるゝ週刊『ゴールド・コースト・リーダー』紙（一九一三年六月二日）に次ぎの如き記事が掲げられた。

『獨逸植民大臣は一九〇三年乃至一九一三年の間に、叛亂鎭壓の爲め十萬五千の土人の殺害せられし事實を認めて居る。此の中には熱帶狂燥病――總べての獨逸人は之に罹さる――に罹れる獨逸官吏及び商人に殺戮せられたる多數の土人を包含しては居らぬ』。

右の記述は事實を述べたものである。一八九四年獨逸官憲の調査に係るトーゴーランドの人口は、土人二百五十萬白人五十六名であつた。然るに二十年後の

一九一三年の調査では、土人は百五十萬人に減じて居る。統計上數字の過不足は多少免がれざる所なりとは云へ、二十年間に約半數に減じて終つたと云ふことは、如何に獨逸人の土人迫害が甚はだしきかを立證するに十分である。

獨領東部阿非利加は、他の獨逸植民地に比すれば饒多の人口を有して居る。すなはち三十八萬方哩の地域に八百萬弱の人口である。併しながら此處も御多分に洩れず其の歷史は血腥き頁を有して居る。一八九九年同地方に所謂『大叛亂』なるもの突發し、時の宰相ビスマーク公はフォン・ウイースマン大尉をして鎭定軍の指揮官たらしめ、征服を以て唯一の目的とすべき旨を命令した。獨逸軍は激戰を行ふこと百回に及び、將校三十五名は戰死し、兵士約二百名は病氣其の他の事項により死亡し、下士の死亡一千名以上に達した。土人側に幾何の戰死者を出したかは推算區々であるが、之を十萬人以下と見積る者は殆んどなく、然して此の叛亂に伴なへる各種の災禍により、更に數十萬人の土人が斃れたのは獨逸人も認容する所である。

獨逸人は阿非利加大陸の黒人諸種族竝に南太平洋のポリネシア諸種族を見ること、殆んど牛馬と擇ぶ所がない。獨逸人の此の心情はウルヘルムスタール事件

に於て、遺憾無く外部に暴露せられて居る。當時英國は自國領トランスカイ地方より、獨領西南阿非利加の鐵道敷設の爲め、勞働者を募集することを獨逸に許した。應募したのはカッフル族であつたが、彼れらは工事に從事すること數箇月にして當初の契約に反し勝手に勞銀を減額せられ、加ふるに食糧も宿舍も極めて粗惡なるものを當てがはれた。そこで彼れらの不平は遂に同盟罷業となつて現はれた。すると獨逸人は此れが對抗策として、彼れらに食糧をも飲料水をも給せざること二日間に及んだ。熱帶地方に於いて、飲料水を杜絶せらるゝ程大なる苦痛はない。そこで不幸なるカッフル人は、二日目の終りには半狂亂の體となり、形勢愈〻不穩に赴くのみであつた。此に於てか鐵道會社は軍隊の出動を乞ひ、其の銃火によりて多數のカッフル人を殺傷し、無理往生に彼れらを壓伏して終つた。獨逸人側が被害者に對して何等補償の途をも講せなかつたのは勿論のことである。此の事件は隣接の土人種族を震懾せしめ、爾後獨逸は勞働者の補給を人口の稀薄なる自國植民地内に於て行ふの外無きに至つた。何となれば何人もウイルヘルムスターの繰り返しを願ふ者はないからである。すると今度は獨逸領内の土人も難を怖れて次第に隣接の植民地へ逃げ出すことゝなり、然らでも稀薄な人口が、尚ほさら稀薄となつた。土人の懷柔を怠り、其の援助無くして植民地の産業を發展せしめ得べしとせる獨逸植民政策の歸着點は此れである。獨逸は根本に於いて謬まつて居たのである。

第二十九章　亡びたる獨逸植民地(産業的)

箇々の獨逸植民地の價値に就き說述するに先だち、其の主要なる生産物に就き解說を下せば、植物性脂肪を第一とし、油椰子、コヽ椰子、グラウンド・ナット、棉實、コヽア豆は何れも此れが原料である。此れに次ぐものを價格の順位に列記せば金剛石、護謨、黃金、サイザル麻、棉及び香木等である。

(一)　油椰子は美觀に於ても生産力に於ても、脂肪原料植物中の覇王である。此の植物は繁殖力强盛にして、獨領カメルーン及びトーゴーランドの數百萬町歩に亘る森林地帶に生育し、文明人の來つて其の間斷無き果實の收穫に着手するを待つて居る。昔埃及人は其の幹の液汁を採りて泡立てる酒を釀し、之を以て神聖なる死人の體軀に塗付けたものである。歐洲人が其の黃金色の脂肪を利用し始めたのは、十九世紀に入つてからのことである。油椰子の外觀は裝飾用に供せらるヽ鉢植のものと酷似して居るけれども、唯だ遙かに大形で成長せるものヽ樹幹は四丈乃至六丈に達する。雌雄異株であつて、雌樹の幹頭からは胡桃大の果實五百乃至二千を包む巨大なる房を垂下する。其果實の甘皮は純黃色の脂肪に富み、鞭

き外皮を以て被はれて居る。椰子油は此の甘皮から得らるヽのである。甘皮を除きたる後には桃實大の核が殘る。此れすなはち椰子胚である。油椰子にも種類が多いけれども就中エロエイス・ギネエンシス(Elocis guineensis)なる學名の種類が最も廣く分布して居る。此の種の果實は甘皮纖維組織中に六割六分胚子中に四割九分の純良脂肪を含有して居る。近年此の脂肪よりグリセリンを分出せしむるに至つた。此の貴重なる成分は七分乃至九分含まれて居る。此の椰子は今日既に西部阿非利加產物の大宗たるのみならず、森林地帶に人の利用に供せられざるものが無數に存する。現に輸出せらるヽは實際の產額の十分の一にも足らぬと云ふことである。其の脂肪は當初は石鹼製造其の他工業用に供せられたけれども一九〇〇年頃よりバタ其の他食用脂肪に用ひらるヽに至つた。獨領西部阿非利加(カメルーン及びトーゴーランド)の戰前の年輸出額は三百萬圓に過ぎなかつたけれども、此れと略ゝ同樣の生育區域を有する英領西部阿非利加が一九一二年度に五千三百萬圓(三十一萬二千噸)の產額ありしに鑑みれば、今後獨逸式の植樹園直營主義を廢し土着民に對する奬勵策を採ることヽせば數年以內に年額五千萬圓に上らしむること容易であらう。

(二) グラウンド・ナット(Ground nut)は油椰子に次いで重要なる脂肪原料である。一九一三年の歐洲への輸出額は六十七萬噸に達し、其の中佛國のみで食用に供せるもの五十萬噸以上であつた。獨領東部阿非利加の輸出額は一九〇八年に十七萬二千百十四圓なりしもの一九一二年には六十三萬六千〇二十圓に增大した。カルメーン及びトーゴーランドの輸出額は微々たるものであるが、トーゴーランドは曾てグラウンド・ナットを盛んに生產した地であるから、東部阿非利加と合算して年額一百萬圓以上を輸出し得る筈である。

(三) コヽ椰子(Cocoanut palm)の果實は第三位の豐富なる脂肪原料である。其の乾燥せしめたるものが所謂コプラである。コヽ椰子は油椰子と異なり一定の栽培法を要し、且つ海濱にあらざれば生育し難い。獨領東部阿非利加、カメルーン及び南太平洋諸島は總て良好なるコプラ生產地であつて、且つ前途大いに發達の望みがある。併し目下の所は尙ほ頗る幼稚である。又トーゴーランドにも大規模の農樹園があるけれども、年產額は約百八十噸に過ぎない。獨領東部阿非利加に於ける白人經營農樹園のコヽ椰子の立木數は一九一〇年に六十萬本強なりしに一九一二年に八十萬本弱であつた。然して其の四分の一は結實期に達して居る。

成長せるコヽ椰子は一年三十箇乃至三百箇の果實を生ずる。每果約六割の脂肪を含み殘滓は家畜の飼料に供せられる。若し最低三十箇を以つて假りに平均數とせば、獨領東部阿非利加は久しからずして每年二千五百萬箇のコヽ椰子實を輸出し得るに至るであらう。此の巨數の椰子實は八千噸の食用脂肪、價額約二千萬圓を意味する。

(四) コヽア豆は品質最優等の脂肪を含有し、日常の食用としては餘りに高價であるけれども、醫療用のオイントメント又はポマードとして好適である。大戰前の獨領阿非利加植民地の年輸出額は二百萬圓以下なるに、英領阿非利加植民地の年輸出額は約三千萬圓に達せんとして居る。此の大差異は英獨の植民地經營の巧拙を示すものである。獨逸人のやうに自身直接にコヽア樹の植林を管理せんとしたのは、却つて事業の發展を妨ぐる結果を來した。英國人の如きは殆んど全部土人に委ね、唯だ之を懇切に指導するに止めて、自他共に益するの方針を採つて居る。戰爭前獨領カメルーンのコヽア豆年輸出額四千五百噸中三千八百四十噸までは、白人直營の植樹園より採取したもので、土人の生產せるは七百噸に過ぎなかつた。土人を白人農園に驅使するのみでは、到底熱帶產業の隆興を期し難い。

英獨の植民地經營方針の優劣は、次ぎのコ、ア豆輸出表に照せば明瞭である。

年次	獨領カメルーン（面積一九一、〇〇〇方哩）	英領黄金海岸（面積八三、八〇〇方哩）
一九〇六年	四八〇、〇〇〇圓	三、三六二、六九〇圓
一九一一年	一、四〇〇、〇〇〇	一八、一三四、六八〇
一九一三年	一、五〇〇、〇〇〇	二四、八九二、一八〇

若し獨逸式を英國式に改めて經營せば、舊獨逸植民地より年額三千萬圓に近きコア豆を輸出することは易々たるものであらう。

（五）護謨樹の栽培は尙ほ試驗期に屬する。獨逸は一九一二年に於て阿非利加に十一萬二千エーカーの護謨林（二千萬本以上、其中約半數は液汁採收に適する程度に成長せるもの）を有して居た。然るに勞働力不足の關係上採收に多大の經費を要し、一封度二馬克約一圓以下で輸出すること不能であつたから、英領東印度方面の護謨と競爭すること困難であつた。併し東部阿非利加の如きは土質及氣候が頗る護謨樹に適して居るから、經營方法の如何に依つては將來有力な生產業の一となること疑ひがない。

（六）サイザル麻（Sizal hemp）は墨西哥及び中央亞米利加を原產地とせる纖維原料植物であるけれども、獨領東部阿非利加の風土に好適し、且つ栽培も簡易であるから此れ亦將來大に囑目すべきものである。

（七）棉花も亦獨領東部阿非利加に於ては試驗期に屬するけれども、此の植物のみは種々事情に依り大部分土人の隨意栽培に委ねられた爲め、逐年好成績を擧げんとする有樣である。すなはち一九一〇年の輸出額三十七萬五千六百四十圓が翌一九一一年の六十六萬五千九百萬となり、更に翌々一九一二年には百〇五萬五千百十圓と云ふ急速度の增加を示したのである。

（八）鑛產物は西南阿非利加の最大富源であつて、其他の獨領諸植民地は何れも云ふに足らない產額である。一九一三年度に於ける西南阿非利加の金剛石產額は二千百五十三萬二千三百圓に達した。此れは未曾有の高額であつて、殆んど南阿非利加のキンバーレーの最良の年產額に比敵せんとして居る。併し例年は之よりも頗る少額で平均一千五百萬圓見當である。また西南阿非利加の銅及び銅鑛石は同じ一九一三年に二千五百萬圓以上の產出額に達した。

大戰勃發前一箇年間に於ける獨逸各植民地の生產物價額を揭ぐれば、植物的生產物（卵子實、コ、ア豆、棉、サイザル麻、護謨等）三千九百八十萬圓、動物的生產物毛皮、象

牙、駝鳥羽、生畜等）約三百二十萬圓、鑛物的生產物（金剛石、眞珠、銅、金等）約二千五百萬圓であつた。然して獨逸植民地と本國との貿易額は輸出入合算して二億二千四百七十萬圓に上つた。併しながら獨逸植民地の開發は要するに今尙ほ極めて幼稚なものであつて、獨逸に代つて此れが統治を引受くべき英、佛、白及南阿聯邦諸國は之が行政に本國の國庫補助を要せざらしむるまでには細心の注意を拂つて經營改善の實績を擧げねばならぬのである。一九一三年度の獨逸植民地豫算は左の如くであつた。

植民地歲入	二千一百十五萬圓
獨逸帝國補助金	五千三百四十萬五千圓
植民地歲出	七千四百五十五萬五千圓

以下各植民地の概要に就いて說述せんとする。

獨領東部阿非利加

獨逸東部阿非利加は面積約三十八萬四千百八十方哩。獨逸植民地中最大のものであつた。之を獨逸に比すれば一倍半を超え、更に日本（朝鮮を除く）に比すれば約二倍半に相當する。人口は大戰開始前年の調査に從へば左の如くである。

土著民（バンツー族の黑人を主成分とす）	約七百六十六萬人
印度移住民	約八萬八千人
亞剌比亞人	約四千一百人
歐洲人	約五千三百三十六人
（獨逸人）	約四千一百〇七人）

獨領東阿は單に面積の最大なるに止まらず、其の農業上竝に林業上の天然資源の豐富なることに於て、獨逸植民地中の冠たるものであつた。唯だ獨逸人の經營宜しきを得ざりし爲め、十分開發の效を擧ぐる能はざりしは、既に述べた通りである。左に一九二年度に於ける獨領東部阿非利加の主要なる產物の種類及び價額を揭ぐる。

種類	價額
護謨	八、三九〇、〇〇〇馬克
棉花	二、一一〇、〇〇〇
サイザル麻	七、三五九、〇〇〇
コプラ	一、五六三、〇〇〇
珈琲	一、九〇三、〇〇〇
コア	一四、〇〇〇

木材	二四八、〇〇〇
樹膠	一二〇、〇〇〇
畜毛	四四、〇〇〇
皮牙	四、〇六七、〇〇〇
象牙	三六一、〇〇〇
黄金	五三一、〇〇〇

（註　一馬克は邦貨五十錢弱に相當す）

また一九一〇年乃至同一二年の貿易狀況は左の如くである。

年度	輸出	輸入
一九一〇年	二〇、八〇五、〇〇〇馬克	三八、六五九、〇〇〇馬克
一九一一年	二二、四三八、〇〇〇	四五、八九二、〇〇〇
一九一二年	三一、四一八、〇〇〇	五〇、三〇九、〇〇〇

また大戰開始當時に於ける鐵道線路は左の如くである。

	延長	開通年度
ダンガニーカ鐵道、ダル・エス・サラームよりキゴマに至る）	一、二五二哩	一九一四年
ウサンバラ鐵道（ダンガニーカよりモシーに至る）	三五二	一九一一年
シギ鐵道	二三	一九一〇年
計畫線（タボラよりカゲラニーに至る）	五三一	未開通

獨領東部阿非利加は獨領植民地中最後まで頑強なる抵抗を試み、英國遠征軍、南阿聯邦軍及び白耳義植民地軍は約三箇年半に亘る難戰の後、一九一七年十一月下旬辛うじて之を平定することを得た。爾後同地は英國の軍事占領下に置かれたが、一九一九年六月二十八日調印の對獨講和條約の結果、國際聯盟の下に委任統治に附せらるゝことになり、北西隅のルバンギ及びウルンヂ地方を白耳義の管理に委し、又東南隅の一小地方を葡萄牙の管理に委するの外は、其の大部分を擧げて英國の委任統治權下に置くに至つた。獨領東部阿非利加の位置は、英領東部阿非利加とローデシア以下南阿非利加の諸地方との連接部に當り、阿非利加縱斷鐵道すなはちケープ・カイロ鐵道の設計通路として重要である。英國は大戰前に於いては獨逸をして此地を手放さしむることゝ不可能と考へたので、此の豫定線は白耳義領コンゴー域内を經由せしむる手筈であつた。獨領東部阿非利加の海岸線は六百二十哩であつて、面積に比し短少であるけれども、ダル・エス・サラームの良港を控え、英領ザンジバールと共に此地方の生產物の呑吐口となるであらう。

獨領西南阿非利加

獨逸西南阿非利加は面積三十二萬二千二百方哩を占め獨領中第二の大植民地

であつた。氣候は乾燥酷熱にして降雨に乏しく、殊に其の八百哩に亘る海岸一帶には荒寥たる砂丘遠く起伏し、內地またカラハリ沙漠に連る礦確の土質にして、有用植物の生育に適する部分は極めて僅小であるが、同沙漠の東隣ナマクワランド地方に於ては駝鳥及び綿羊の飼養行はれ相當の成功を收めんとして居る。然るに一度該植民地の北西部に位するダマラ・ランド海岸地方に於て金剛石鑛脈發見の報傳はるや、獨逸本國の投機師冒險家は相競ひて此地に向ひ、久しからずして一萬餘の在住白人を算するに至つた。次いで南東部に位するナマクワランドに於て銅鑛及び鉛鑛の有望なることも發見せられ、該植民地の價値が地表に存せざる代りに、地中に存すること明らかとなつた。唯土人の稀少なる爲め勞働力の缺乏甚だしきことは同地鑛業開發上の一大障碍である。すなはち一九〇四年のヘレロ族叛亂鎭定以來、さなきだに稀薄なりし人煙は念〻稀薄となり、今やダマラ族、ホッテントット族、ブッシュマン族、ナマクワ族等低級の黑人部落を悉く合算するも、十四五萬乃至二十萬人に過ぎざる有樣である。一方歐洲人は一九一三年度の調査に於て一萬四千八百十六人に上り、海外植民地移住獨逸人の六七割は此地に入つて居る。然かも此等獨逸人は金剛石及び銅等を得んが爲めに斯の如き蠻地の生活

を忍べる一時的移民に過ぎぬのである。

一九一二年度に於ける獨領西南阿非利加の主要なる產物の種類及び價額を掲ぐれば左の如くである。

種類	價額
金剛石	三〇、四一四、〇〇〇馬克
銅	六、五二三、〇〇〇
鉛	二二八、〇〇〇
家畜	三五、〇〇〇
毛皮	三〇六、〇〇〇
羊毛及び駝鳥羽	二四五、〇〇〇

また一九一〇年乃至同一二年の貿易狀況は左の如くである。

年度	輸出	輸入
一九一〇年	三四、六九一、〇〇〇馬克	四四、三四四、〇〇〇馬克
一九一一年	二八、五七三、〇〇〇	四五、三〇二、〇〇〇
一九一二年	二九、〇三五、〇〇〇	三三、四九九、〇〇〇

また大戰開始當時に於ける鐵道線路は左の如くである。

名稱	延長	開通年度
スタヴィ鐵道	五七八哩	一九〇六年

スワコプムンド・ウインドフーク線
オタヴイ・グロートフオンタイン線
ルーデリッアクト・ケートマンスホープ線
（セーハイム・カルクフオンタイン線を含む）
ウインドフーク・ケートマンスホープ線

此の二千哩に近き鐵道線路は、金剛石並びに銅鉛等鑛産物の開發上急遽敷設せられしものたること勿論である。

獨領西南阿非利加は一九一五年六月を以て南阿聯邦軍に征服せられ、爾來同國の軍事占領下に在つたが、對獨講和條約の結果國際聯盟の名に於いて南阿聯邦政府が之に對して委任統治を行ふことゝなつた。久しく該植民地の腹面の荊棘たりし英領ウォルフイッシ灣は茲に至りて、其の開發の絶好門戸たるの職責を果し得るやうになつた。金剛石鑛脈は今後幾何の期間採掘の餘地を存するか疑問であるけれども、銅及び鉛の採掘は尚ほ大いに發展の見込がある。唯だ土着民を保護して鋭意其の增殖を圖るにあらずんば獨領西南阿非利加の富源開發は殆んど不可能であらう。

カメルーン

カメルーンは面積十九萬一千百三十方哩、之に一九一一年十一月四日の獨佛協定の結果、佛國より獨逸に割讓せられたる新カメルーンを加算するときは約二十九萬方哩である。其の土人はデュアラ族バクウイリ族等の黑人にして一九一三年の調査に據れば總人口約四百五十萬である。然して歐洲人の居住者は二千人に足らなかつた。雨量多く地味肥沃なる爲め、農業上及び林業上の開拓の見込著大であるけれども、唯だ氣候の溽熱にして瘴癘の氣に富める爲め白人の永住に適せず。畢竟原料產地として利用するのほか無き地域である。又獨佛協定により獨逸の一時奪取せる新カメルーンは地形上佛領スーダンのウバンギ地方と佛領コンゴーとを中途に阻絶し、コンゴーの本流を挾んで白耳義領コンゴーに迫つて居るけれども、其の約十萬方哩の廣大なる地域の殆んど全部は純然たる荒蕪不毛の境である。カメルーンは一九一六年一月八日を以て完全に協商國側の征服する所となり、佛領コンゴー總督英領ナイゼリア官憲と共同して之が行政事務を管掌し、次いで對獨講和條約の結果、新カメルーンは當然佛國に歸還せりと認められ、其他は國際聯盟の下に委任統治制度を布かるゝに至つた。然して結局海岸より北東方向に走る國境沿線の一部に於て英國の若干地域を割取すべきを除くの外事實上全部佛國に歸屬することゝなつた。一九一二年度に於けるカメルーンの

三八二	一九〇二乃至一一年
九三	一九〇九年
五四五	一九〇九年
五二八	一九一二年

主要なる産物の種類及び價額を掲ぐれば左の如くである。

種類	價額
椰子實及椰子油	六、〇二七、〇〇〇馬克
護謨	一一、四七二、〇〇〇
ココア	四、二四二、〇〇〇
木材	六九六、〇〇〇
象牙	五三六、〇〇〇

また一九一〇年乃至同一二年の貿易狀況は左の如くである。

年度	輸出	輸入
一九一〇年	一九、九二四、〇〇〇馬克	二五、四八一、〇〇〇馬克
一九一一年	二一、二五一、〇〇〇	二九、三一七、〇〇〇
一九一二年	二三、三三六、〇〇〇	三四、二四二、〇〇〇

また開戰當時の鐵道線路は左の如くであつた。

	延長	開通年度
マネンガバ鐵道	一六〇哩	一九一一年
デュアラ・ヌジョンガ線	二九三	（未開通）

因みに獨逸が如何に土着民の懷柔に拙劣なるかを示す一例として次の一挿話を附記しやう。デュアラ族の國王總酋長）ルードルフ・ベルは父王在位中に獨逸本國に留學し、具さに普魯西式の敎育を受けて歸國した。然るに彼は直ちに洋裝を抛ちて土俗の風に復し、即位後も機會ある毎に獨逸人の官僚思想に反抗しつゝあつたが、大戰發生後一九一四年九月下旬サー・チャールス・ドベル將軍麾下の英軍がデュアラを攻略するに先だつ數日、英軍と款を通せんと謀つたとの廉で、獨軍の爲めに死刑に處せられた。然かもデュアラ族は之が爲め獨逸人を憎むの念頓に熾烈となり、遂に却つて獨軍開城の期を早めるの結果に立到つた。

トーゴーランド

トーゴーランドは阿非利加大陸に於ける獨逸植民地中最小のものであつた。然かも其の面積は約三萬三千七百方哩、すなはち白耳義の略三倍に該當する。人口は一九一三年の調査に據ればエウェー族の黒人土着民約一百〇三萬二千人、歐洲人三百六十八人であつた。トーゴーランドは一九一四年八月二十六日すなはち大戰勃發後三週間を經ずして協商側の征服する所となり、英佛の共同管理下に置かれた。次いで對獨講和條約の結果としてトーゴーランドは完全に獨逸の主權より脫離し、國際聯盟の委任統治制度に從ひて英佛兩國間に分割せらるゝことゝなつた。

一九一二年度に於けるトーゴーランドの主要なる産物の種類及び價額を掲ぐれば左の如くである。

種類	價額
護謨	九七六、〇〇〇馬克
椰子實及椰子油	七九二、〇〇〇
コプラ	六一、〇〇〇
コーア	二四三、〇〇〇
棉	五二二、〇〇〇
家畜	六一〇、〇〇〇
象牙	四二、〇〇〇

また一九一〇年乃至一二年の貿易狀況を見るに次ぎの如くである。

年度	輸出	輸入
一九一〇年	二、二二二、〇〇〇馬克	一一、四六六、〇〇〇馬克
一九一一年	九、三一七、〇〇〇	九、六二〇、〇〇〇
一九一二年	九、九五九、〇〇〇	一一、四二八、〇〇〇

また開戰當時に於ける鐵道線路は左の如くであつた。

鐵道	延長	開通年度
海岸鐵道	四四哩	一九〇五年
ローメ・ハリメ線	一二九	一九〇七年
ローメ・アタクパメ線	一六七	一九一一年

トーゴーランドは其の土着民が既掲の如く頗る稠密なるのみならず、氣候及び地味が有用植物の繁殖に好適せるの關係上、原料生産地としては貴重なる價値を有して居る。併しながら其の極端なる濕度と高温とは白人の永住をして全然不適當ならしめ、獨逸帝國政府が巨額の費用を投じて衛生設備の改善に力めたに拘らず、同地方一帶に漲る瘴癘の氣を全部拂ひ除くことは出來なかつた。同地方は英領黄金海岸と共に依然として『白人の墓』である。唯だ其の生産物呑吐口たるローメのみは附近の沼澤地埋立後マラリア熱病の危險大いに減少し、在住白人の大多數も亦此の處に集中して居る。

太平洋上の獨領植民地

太平洋上の獨領植民地は其の地理上の位置から、カイゼル・ウイルヘルムスランド及び附近の稍大型の群島と、サモア群島とマーシヤル、カロリン、マリアナ等赤道以北の諸小群島との三集團を形成し、面積合計九萬六千一百六十方哩にして、阿非利加大陸の獨領植民地の十分の一にも足りない。また人口は一九一三年度の調

査に從がへば土着民六十三萬九千二百四十人、白人一千九百八十四名に過ぎなかつた。併しながら氣候風土の白人に適應せる點は前者遠く後者の上位に在る。唯だ數群の島嶼として廣く大洋上に分散して居る爲め、一團塊としての有力なる植民地を形成することはもとより絶望である。大戰勃發當時太平洋上の獨領諸植民地に在留せる約二千名の白人中獨逸人は約一千五百名であつたけれども、日英兩國の軍事占領行はるゝと同時に其の多くは退去を餘儀なからしめられ、日本人及び英國人之に代るに至つた。

右の中カイゼル・ウイルヘルムスランドは面積約七萬方哩すなはち獨逸本國の約三分の一強に當り、然かも人口は一九一三年の調査に據れば、パプア族の土着民僅かに十一萬人を算するに過ぎなかつた。ビスマーク群島はニュー・ブリテン(獨逸名ノイ・ポンメルン)、ニユー・アイルランド(獨逸名ノイ・メクレンブルヒ)、ニユー・ハノーヴアー(獨逸名ノイ・ハノーフエルル)等の諸島より成り面積約二萬方哩、人口は一九一三年の調査に據ればパプア族及び其近似族の土着民合計約十九萬人である。ソロモン群島中獨逸に屬せし部分はブーガンヴイル島並に若干小島より成り、面積約四千二百方哩、一九一三年の調査に據れば土着民人口約四萬五千人を算する。

人種はパプア族と同樣メラネシア系に屬して居る。サモア群島中獨逸に屬せる部分はサヴアイ及びウポルーの二主要島より成り、面積約一千方哩、一九一三年の調査に據ればポリネシア系の土着民約四萬人を算する。赤道以北の獨領諸群島は何れも彈丸黑子の小島嶼の集合であつて、マリアナ群島は面積約二百五十方哩、土着民の人口約二千人、カロリン群島(ペレウ群島を含む)は面積約五百六十方哩、土着民の人口約四萬人、マーシヤル群島は面積約百五十方哩、土着民の人口約一萬五千人である。以上諸群島の土着民は何れもミクロネシア系に屬する。

太平洋上の獨領諸植民地に於ける一九一二年度の主要なる產物の種類及び價額を揭ぐれば左の如くである。

種類	價額
コプラ(乾椰子實)	一〇、〇八〇、〇〇〇馬克
コーア	九一五、〇〇〇
護謨	二六七、〇〇〇
磷石	四、九九一、〇〇〇
眞珠	一五八、〇〇〇
羽毛(主として極樂鳥)	四四九、〇〇〇

太平洋上の獨領植民地は大戰勃發後一箇月乃至三箇月半の間に悉く協商國側

の占領する所となり、赤道以南は濠洲及び新西蘭の管理に歸し、同以北は日本の管理に歸した。然して對獨講和條約の所定により、之を國際聯盟の下に委任統治に附することゝなり、赤道以北の諸群島に就きては日本、サモア群島に就きては新西蘭、サモア群島及びナウラ島(ソロモン群島の中に在り)を除く外の赤道以南の獨逸植民地に就きては濠洲聯邦、ナウラ島に就きては英本國之が委任統治權を得るに至つた。日本は赤道以北の獨領太平洋諸島を支配するに至れる當然の結果として、從來位置懸絶せし濠洲聯邦とのの接觸の機會を著しく增大したるのみならず、マリアナ群島中に米領のグワム島を含有することにより米國との交涉關係も一段の痛切を加ふるに至つたのである。

膠州灣租借地

獨逸は一八九七年自國宣敎師殺害に對する報復として、詭計を用ひて膠州灣を占領し、次いで之が九十九箇年に亘る租借權を取得せし以來、青島を中心として巨額の費用を投じ、一箇の堅固なる要塞設備を完成し、亞細亞大陸に向つての自國の政治的並に經濟的發展の足掛りたらしめんとした。總督は海軍將校を以つて之に任じ、此地に根據を置ける獨逸東洋艦隊を益々擴張して、列國の對支利權爭奪に

拮抗せしめんと企圖しつゝあつた。すなはち獨逸人は此の僅々二百方哩の膠州灣租借地を以て『支那に侵入すべき窓口』に供せんとしたのである。然るに大戰開始後、同地は遂に一九一四年十一月七日を以て日本の軍事占領下に歸し、更に對獨講和條約の所定に據り之に附隨する山東省内の一切の利權と共に日本に歸屬せしめらるゝことゝなつた。之が處分は端なくも日支兩國反目の一大誘因を爲し、日本は再三之を後日に於て支那に還附すべき旨聲明せるに拘らず、支那は自國の參戰により當然獨逸の租借權を消滅せしめたるものと信じ、日本を經由せずして直接に獨逸より之を復歸せしむべしと主張して止まず、其の要求の協商國最高會議に入れられなかつた爲め、對獨講和條約調印の拒絶となり、日貨ボーイコット其の他の排日運動となつた。斯くて日支關係は大戰終了以來頓に險惡に趨き英米の企業家をして私かに會心の笑を洩らさしむるに至つた。日本は少からざる犧牲を拂つて支那の爲めに東洋の一禍根を除去しながら、却つて支那より怨みを買ふの憂目を見たのである。

括說

獨逸は『日向(ひなた)の地』を求め、然して熱帶圈内に於て十分に之を得た。然るに烈日

と瘴氣とは白人の植民を不可能ならしむることが明らかになつた。獨逸が植民地獲得の主要目的とせる自國過剰人口の捌き口たらしむることは全然失敗に終り、徒らに本國の國庫に多大の負擔を及ぼすのみであつた。故に假へ對獨講和條約が現實の條文の如く獨領植民地沒收を規定せずして、之が還附を認めたと假定するも、獨逸は依然其の領土慾を滿足せしむることを得なかつたであらう。今や大戰の敗衂により非常なる悲境に沈淪せる獨逸が、積極的侵略政策に訴へて其の領土慾を滿足せしむるの途は當分の間は絕えたから、向後同國の過剰人口は專ら他國の國旗下に入ることゝなるであらう。此れ獨逸人に取りて寧ろ最も安全なる發展策と稱すべきである。

對獨講和條約の結果、亡びたる獨逸植民地を引受くる列國は如何にして之が經營を完うすべきであらうか。獨領植民地は眞正なる意義の植民地として發展せしむるの不可能なるは、獨逸の苦しき經驗が之を立證して居るが、原料生產地としての開拓の希望は前途洋々たるものである。然かも獨逸が此の後者の意義に於てすら其の植民地を十分に利用し得なかつたのは、經營の根本方針の誤謬と土着民の人口稀薄に伴ふ勞働力の缺乏とに基因したのである。列國の植民地經營者は先づ植民地の爲めの利益を開却せざるやう注意せねばならぬ。獨逸の徹頭徹尾本國を中心として萬事を處理せることは、西班牙、葡萄牙等落伍せる植民國の覆轍を履めるものであつた。次ぎに列國は虐げられたる獨領植民地土着民を愛撫して其の人口減退を防止すると同時に、舊來の各自國の熱帶植民地土着民を招引して勞働力の補充を圖らねばならぬ。秩序的指導は土着民待遇上の秘訣であるけれども、之に多大の溫情を加味するにあらざれば、熱帶植民地の勞働力を充分に發揮し難いのである。斯くて獨逸植民地經營者の殘せし失敗の跡にして能く改善せらるゝに於ては、舊獨領植民地の生產物は必ずや非常なる急速度を以て增加すべく、單り之を管理する各國のみならず、全世界も亦其の饒多なる富源開發の福祉に浴するであらう。

最近の獨逸

大正八年十一月三十日印刷
大正八年十二月三日發行

不許複製

定價金三圓五十錢

通俗國際文庫
第一卷最近の獨逸奥付

編著者　稻原勝治
發行者　上原好雄
東京市麹町區下二番町六十八番地
印刷者　松澤玨三
東京市麹町區下六番町十七番地
印刷所　同勞舍活版所
東京市麹町區下六番町十七地番

發行所　東京市麹町區下二番町六十八番地
振替口座東京四八五五八番
外交時報社出版部
電話九段一〇二九番

終